コトノハ　＜深海魚２＞

イノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コトノハ　＜深海魚２＞

【Ｎコード】
Ｎ０５１４Ｔ

【作者名】
イノル

【あらすじ】
薫は夢を見る。
それは、私の悪夢から救ってくれた彼の夢だった。

彼の夢…。
それは、彼が、高い建物から落ちていく夢。
現実ではない、そう信じているけれども、何故か心がざわつく。

リストカットの少女、消えていく彼。
様々な夢が薫を襲う。

1　欠片（前書き）

この小説は「深海魚」の次作になっております。
人物紹介など、先にそちらを読んでいただけるとわかりやすいと思います。

「深海魚」――　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７８０２ｓ／

1　欠片

1　欠片

夢を見た。

『夢を見る』のには意味があるという。
ひとつは、「良い夢を見たな」と思って、今日一日を過ごせる事。
ひとつは、「悪い夢だったけど、夢で良かった」と思う事。
要は夢を見たといっても、ああ、夢で良かった。と思えるように脳が作り上げる幻。

――――――――――では予知夢とはなんだろう？

さらに言うと、前回経験した、「夢を共有する」という出来事は

なんだったのだ。

薫は思う。

「夢とは自分と他人との境界がなくなる幻の場」なのではないか。

そんな事を考えてみるのだ。

2　夢の断片

1

薫は夢を見た。

そして布団から飛び起きた。

文字通り、目を開いた瞬間、布団をまくり上げ身体を跳ね上げたのだ。

こんな経験は滅多にない。

身体は寝汗でじっとりと湿っており、顔も汗が滴り落ちてくる。

胸の鼓動は五月蝿いくらい激しくて、手は小刻みに震えている。

一体なんだったというのだろう。

そう、夢を見たのだ。夢を。

彼が落ちていく夢を…。

薫はともかく落ち着こうと、ベットの上で壁にもたれ掛かり、深呼吸をした。

たかが、夢だ。

されど、夢なのだ。

薫は数ヶ月前の出来事を経験している。

私の夢に侵入してきた「彼」は、私の危険を察知して、夢の狭間へと忠告しに来た。

そして、事件が起こった。

私は襲われかかったが、「彼」が助けてくれた。だけども、阻止

しきれなくて、私は頭部を強打し、昏睡するという事になってしまった。
そのまま私の意識は夢の奥底へと旅する事になったのだ。
自分の忘れてしまった過去を旅するという出来事……。
「彼」は他人の夢に侵入する事が出来る。
私の過去の旅にも一緒につきあってくれた。
だけども、その旅から帰ってきた後、彼は姿を消した。

その彼の夢――――――――――。

彼が高い建物から落ちていく夢。

＋　＋　＋

彼は立っていた。

目線は空を見上げていた。

私もつられて空をみた。蒼くて広い、初夏の空。

そして私が彼を見直すと、やはり背後にも空が見える。
そこで此処は高い場所なんだ。と確信する。

何故か彼はコンクリートの床の端に立っていた。
足元から風が舞っているようで、服も、髪もたなびいていた。
私はそんな所、危ないじゃない。と言おうと、口を開きかけた。

――――その時、

彼は私に微笑みかけ、そのまま身体を後ろに傾けていく。
スローモーションに倒れていく身体。

私は叫ぶことしか出来ない。
彼は私の視界から少しずつ消えていく。

そして、完全に消えてしまうのだ。

2　夢の断片

2

これで三日も同じ夢を見た事になる。
精神的消耗も激しかったが、彼の事が心配でならなかった。
これが「ただの夢」なのだろうか？
ただの夢であって欲しい、だが、それを確認する方法は今、全く無かった。
だって彼は行方がわからないのだから。
同じ大学とは言っていても、彼は一つ学年上の法学部、私は心理学部と全然構内での交流がまるでない。さらに彼が穴場として使っていた図書室の中にある準備室にも彼が居た、という痕跡もない。まるで其処に彼が存在さえしていなかったかのような静かさだった。
人事課に聞いても「今は個人情報は教えられない」の一点張りだ。
薫は講義も耳に入らないほど、あの意地悪で態度が悪い、けだるい目をしている槙野カヲルの事が頭から離れなかった。
どうして私はこんなに彼を捜しているのだろうか。
私はどうやって彼と知り合ったのだろうか……。
そうだ！　夢の狭間だ！
思わず声を上げ、席から立ち上がってしまった。講義中だった教授の目が光る。
「なにか質問かい？　二宮薫くん」

薫は顔を真っ赤にさせて席についた。恥ずかしい。講義の事を全く忘れていた。周囲の視線を一斉に受けて、それから逃れるように窓の外を見る。

そうだ、彼は夢の狭間へと私を連れて行ってくれた。

だが、あれから私は何度となく狭間に行ってみようとしたものの、行けた事は一度も無い。夢は夢のままで終わってしまうのだ。

だが今回は、自分の意識の中で夢と理解している、客観的な自分がいる。

もしかしたら今日もあの夢を見るかもしれない。

あの落ちていくカヲルに付いていけば、辿り着ける……？

またあの夢を見なければいけないのか、という気持ちもあるが、今は彼に会える唯一の方法のような気がする。

薫は講義を終えると、友人の誘いも断り早々と大学を後にした。

早く帰っても意味はないが、少しでも、考えを集中させたかった。

どうすれば、夢の中で客観的に動くことができるのかと。

＋　＋　＋

――――――――――これは明晰夢というのだろうか

予想通り、夢を見た。

広い空に、ビルらしき建物の端に立っている、彼。
昨日の夢と寸分の狂いも無い。
いつもはただ叫んでいるだけで、見ているだけの私。

だが、今日は違う。
彼の身体がふうわりと傾きはじめると同時に薫は走り出した。
身体が水にまとわりつかれているように動きにくい。だけども、彼を捕まえなければ。
必死に足を動かす。

少しずつ、前に進む薫。

カヲルの表情がいつもと違っていた。まるで『なにしてるんだ、おまえ』と言っているようだ。前には現れなかった表情。

必死に手を伸ばす。

そして姿が消える寸前、彼の腕に触れた。
薫はその腕にすがる気持ちで、思いっきり握りしめる。

薫の身体が、がくんと傾く。
目に映ったのは、落ちていくカヲルとその底に広がる暗い闇だった――――。

3　草原の一切れ

1

「――――――どうやって此処に来れたんだ？」

その声で、薫は意識が戻った。

顔を上げる。其処は前にも来た事のある室内の中だった。

オンボロな室内。六帖くらいの広さの部屋だが壁は茶薄色をしていて、床はパネルが所々剥がれている。さらに古ぼけたソファにテーブル、後ろには窓。

そしてそのソファに私が捜していた人物がいた。

ソファにだらしなく身体と腕を預け、前に置いてあるテーブルの上には靴のままの脚が乗っている。顔を見上げると、やはりけだるそうな切れ長の目と合った。相変わらず整った顔をしている。

普通にしていれば、まぁ……カッコイイの域に入るのだろう槙野カヲルは、その全てを打ち消すかのように、相変わらずだらしなく、態度が悪い。

……私、どうしてこんな奴に会いたかったのだろう？

ふと、そんな事をよぎってしまうような、再会だった。

「どうやって此処に来れたんだ？　此処は俺しか入れないはずなんだが」
同じ言葉をカヲルは薫に投げかけた。不思議そうな顔をしている。
薫は以前来た時はソファの前にあった椅子に座っていたのだが、今回はパネルの剥がれた床に寝転がっていた。自分が「狭間」に来れた事を確認すると、その状態から立ち上がり、薫は以前から考えていた事を実行に移した。

パァンッ

予想よりも大きい音がして、薫自身もびっくりした。
それ以上にカヲルは目を見開いて、痛がるというよりも驚いている。

――――――薫はカヲルの頬を思い切り叩いたのだ。

絶対、再会したらぶん殴ってやるんだ。と薫は決めていた。突然姿を消されて、こんな夢を見ていたらそんな気持ちにもなるだろう。
「なに、すんだよ」
「何って槙野くん、あの後から姿消して私がどれだけ捜したと思ってるのよ！　学校まで休学して、連絡先も知らないし、どれだけ心配したか……」
途中から言葉が出てこなくなってきた。

まずい。目に涙が浮かんできた。ここで泣いている場合じゃないんだから！　ほら、あいつがまた調子に乗り出す……。予想通り、カヲルはいじめっ子のように、にやにや笑っている。
「へぇ、心配ねぇ」
薫はもう一度手を振り上げた。カヲルはそれを避けようとオーバーアクションで身構えている。
「悪い、悪い。ちょっとした理由があったんだよ。だから学校にも行けなくなっちゃってさ」
頭の上を両手でガードしながら、ふと思いついたようにカヲルは言い出した。
「そうか、あんたにも手伝ってもらおうかな……」
いきなり話を逸らされ、振り上げた手をどう収拾していいのか分からない。
とりあえず、手伝って欲しいという事を聞いてみようか。前回、散々助けてもらったのだ、多少なりとも手伝える事があるなら助けたい。
しかし、あの後またなにかしらの問題を抱えているのか？　カヲルは普段何をやっているんだろう？
「いや、簡単な事だよ。まあ、まずその手を降ろして。そこの椅子にでも座りな」
相変わらず口が上手い。
薫は拍子抜けして、振り上げていた手を降ろし、テーブルの向かいにある椅子に腰掛けた。
「話は簡単。図書室にある準備室の机の中にある手帳を見つけて、その中に書いてある連絡先に電話してもらって、その場所に行ってもらいたいだけ」
ちょっと拍子抜けをした。
だが、彼が居なくなってからあの準備室をくまなく調べたけど、そんな物は出てこなかった。もちろん、あの机の中も調べた。
「それは、あんたの捜し方が悪いんだな。俺なら何処に物を隠すと

思うか？」
……確かに、このひねくれ者なら普通の所に物を置くわけがないか。
「しかし、なんで此処に来たんだ？　なんか理由があるんだろ？」
けだるい目がまっすぐこっちを見た。若干眉間にしわも寄っている。
三度も同じ事を言わすな。そんな表情だ。
「いや、だから、全然姿を現さないから心配になってね……」
薫は気まずい思いで話を反らせるため立ち上がり、彼の後ろにある窓の外に目を向けた。
だって、カヲルが高い所から落ちる夢を見て、その安否が不安になった……なんて言えない。そんな不吉な夢の事は話したくなかった。

窓の外は真っ暗で、なんにも見えない。

……いや、人が居た。
よく見ると、それは女の子であり、うつむきながらじっと腕あたりを見ている。
なにをしているのだろう。あの子は。
薫はさらに見ようと窓から乗り出した。
制服姿の女の子は中学生くらいに見える。そして、何故か腕のあたりを見ている、よく目を凝らして見るとなんと手首から血が滴り落ちていた。それも大量の血が流れて床一面が血の海になっている。
「なに！　あれ！！」
思わず叫んでしまった。
だが、カヲルは顔をしかめただけで特にリアクションもない。
「ああ、アレ。最近来るんだよね。まあ自分の世界に入り込んじゃってるから、俺のほうからも干渉できないし。無害だから放ってる」

そう言って猫のように体を伸ばした。
此処は夢の狭間だ。ということは、彼女はあんな事を夢で見ているということか。
「どうにかしてあげられないの？」
おせっかいだとは思いつつ、カヲルに聞いた。
「言っただろ。自分の世界に入り込んでるって。彼女は自分の殻に籠って、あの夢を見てる。俺が夢の中に侵入しようと、彼女は俺に気付かない。そんなもんさ」
自分の殻に籠って……。どんな辛い事が彼女の身に起こっているのだろうか。
あんな夢を見るくらい苦しい出来事がきっと起こっているはずだ。
薫は彼女の身が心配になった。誰ともしれないあの女の子が。

3　草原の一切れ

2

薫は今、大学の図書室のさらに奥にある準備室の中にいた。
とりあえず彼は元気そうだった。夢の中とはいえ。
少し安堵すると共に、彼から出された課題に今、取り組んでいる。
「この机の事だよね……」
目の前にはちょっとアンティークがかった木製の机がある。
この机の何処かにカヲルの手帳があるはずなのだ。……ただ、一通り調べてみたが、やはり見つからない。引き出しの中は全て空のままだ。
「まさか机の裏に貼付けているわけない……か」
もちろん、そんな事は無かった。わざわざしゃがみ込んで裏を見ている自分が情けない。あの意地悪が。どこに隠したの？
しかたなく机の引き出しを全部取り出してみる。木製でしっかりした作りなので中々重い。
全部を取り出したところで、じんわり汗が出てきた。この部屋は薄暗くて、ひんやりしているとはいえ、もう季節は初夏に入ろうとしている。
小休憩がてらペットボトルの水を飲んでいたら、気がついた事があった。

引き出しの大きさがひとつ、違うのだ。

机の引き出しはもちろん深さはそれぞれに違うが、幅や奥行きは変わらないはずだ。なのにひとつ、奥行きが浅いものがある。これはどこの引き出しだろう？
空になった机の奥を一つひとつ確認していく。

三段連なった、真ん中の奥が若干浅い。
よく見るとそれは裏の板ではないようだ。取っ手のような凹みも見える。
薫はその凹みを掴み、引っ張った。すると、動くではないか。
そうか、これは隠し棚だ。昔、江戸時代くらいの棚などによくあった隠し棚と同じ原理か。
その棚を思いっきり引っぱり、取り出した。軽くほこりが舞う。
埃を吸ってしまった為、むせ返るが、その中には正解が入っていた。

茶色い、使い古された手帳を発見した。

「全く、こんなに手間取らせないでよ」
そう言ったものの、なんだか勝った気がする。
ただ、人の手帳を勝手に見るのは気が引けるが……カヲルはその中を調べてこいと言っていた。手帳の側面を見てみると、紙自体は新しいものらしい。今年に入ってから入れ替えたのだろうか。
意を決して開いてみる。
予想通り何も書いていない。パラパラとめくると手帳の中程に、殴り書きされた電話番号が記入されていた。
おそらく、これがカヲルの言っていた番号なのだろう。
引っぱりだされた棚を放置したまま、薫はその番号に携帯で電話をかけた。

「はい、聖ジョアンヌ保護施設です」

3

聖ジョアンヌ保護施設は、なんと昔、薫が住んでいた高松町にあった。

電話の相手に住所を聞き、薫はその施設の前に居た。

ここになんの用事があるのだろう？

門の中では子供達の賑やかな声がする。休み時間なのだろうか。いきなり知らない人が来たら驚くかな。

薫は躊躇していた。が、その時勝手に門が開いた。

「ああ、お電話いただいた二宮さんね」

門を開いたのは、初老のシスターだった。

「いえ、門の前で知らない人が居る。って子供達が言っていたものですから」

おそらく電話の主であろう、その女性は凛としていて美しかった。年齢を感じさせない何かを持っている。ただ、体調の不良だろうか、顔が青白かった。

そのシスターの案内で施設の中を案内してもらっていた。

しかし、不思議だ。あのカヲルの手帳に記してあったのが、この施設だったとは。

カヲルからは全く想像がつかない。態度が悪く、だらしないあいつから、このシスターに繋がるとは予想もしていなかった。

「カヲルくんの紹介よね？　二宮さんは。二宮……下の名前は何っておっしゃるの？」

「あ、あの薫と言います……」

なんだか、ちょっと恥ずかしい気持ちになった。カヲルが薫を紹介する。……なんとも不思議な構図だ。
シスターは最初驚いた顔をしたが、ふふ、と笑顔になり柔和な顔になった。
「そう、私も歳をとるわね。カヲルくんも、もう大学生ですものね」
「？」
一通り案内をしてもらっている時に、ひときわ賑やかな声が響いてきた。
「おまえら、重いんだよっ！　じゃれるのも大概にしろっ」
この声は……カヲルだ！
カヲルが子供五、六人に囲まれながら相手をしている。さらに背中に二人と背負っているのだ。子供達の面倒を見ている、というよりは、いいおもちゃにされているようだ。
カヲルのあんな表情を見た事がなくて、薫はびっくりした。いつもカヲルは、けだるい目でだらしなくしている所しか見ていない。後は、最初に見せた人を遠ざけるような態度。
だが、今のカヲルはそんな様子は全く無い。一人ひとりに優しく接する、まるで保父さんのようだ。ただ、相変わらず言葉は悪いが。
「カヲルせんせいー！　大人になったら結婚しようねっ」
「あー。おまえが美人になったら考えてやるよ」
とんでもない発言だ。だが、女の子のほうもめげてはいない。
「じゃあ、美人になるように頑張るからね！」
カヲルの一言で直ぐめげる私とは大違いだ。見習わなくては……。
カヲルは子供達の相手をしていたが、薫を見つけると子供達をなだめて、こっちに寄って来た。
「その人、カヲルせんせーの彼女？」
「うるせー」
特に否定もなく、歩いてきた。もう、あれじゃ勘違いされちゃうよ。
「遅いだろ。あいつらの相手が大変なんだよ。手伝え」

え、手伝うってこの事だったの？
ぽかんとカヲルを見上げた。カヲルの表情がいつもと違う。明るい表情。
ふいにシスターが咳き込んだ。その咳は長く続く。
カヲルはシスターの背中をさすりながら、ちょっと悪い、と言ってシスターと共に、ひとつの部屋へ入っていった。
たぶん、あそこがシスターの部屋なのだろう。顔色が悪いと思ったが、本当に病気かもしれない。

しばらくするとカヲルだけが出てきた。
「薬飲ませて、寝かせといたから大丈夫だ。あの人はすぐ無茶をする……」
それから薫を見て、言った。
「まあ、ちょっと来い」

薫が案内されたのは、通常接客室に使われているのであろう場所だった。シンプルなソファがあり、テーブルがある。そこのソファに座らされた。
カヲルも向かいのソファにどすん、と座る。さすがにテーブルには脚をかけなかったが。
しかし自分のもののように扱っているが、大丈夫なのだろうか。
「ったく、遅せえよ。手帳ひとつ見つけるのに、こんなに時間がかかるとはな」
ぐっと薫が詰まる。だって、あんな所に隠し棚があるなんて想像も付かなかったんだもの。とりあえず、その手帳をカヲルに手渡す。
「だけど、槙野くんが此処にいるなんて想像もつかなかったな」
カヲルはガリガリと頭を掻いた。
「あー、まあ、あの院長とはちょっとした縁があってな。今一人で運営してるから、時々手伝ってるんだよ。……春先に院長が体調を崩してさ。それで住み込みで今ガキどもの面倒を俺が見せさせられ

てるって訳だ」
この施設についても説明してくれた。
ここは保護施設と名前はついているが、要は孤児院で、乳幼児から十八歳の子供まで面倒を見ているということだ。義務　教育は当然受ける、が高校に行くかは本人の意思にまかせているらしい。だが、高校はお金がかかるため、大概の子供達は奨学金でなんとか賄っている。
薫はその話を聞いて驚いた。
孤児院といえば、親がいない子供達だ。だが、さっき見た子たちには、そんな不遇な身の上を全く感じさせなかった。
「あれは院長のしつけが良いんだろうな」
ぽつりとカヲルが言った。
カヲルが人を賞賛するなんて初めて聞いた。きっと尊敬しているのだろう。もしかしたら、尊敬以上の気持ちもあるかもしれないかも。
ふいに薫の心がズキリとした。
な、なんで私が槙野くんの事で気に留めなきゃいけないのよ！
薫は突然浮かんだ感情を無理矢理押し込める。
「と、言う事でここに来たおまえにも手伝ってもらう」
「は？」
無茶苦茶強引だ。嫌という暇も無かった。
「当たり前だろ？　今ここのガキどもは二十人住んでいるんだ。その相手を俺一人が見きれると思うか？　それに、俺の居場所を知りたいと言ったのはおまえだぞ」
まあ、確かにそうなのだが、もうちょっとましな頼み方というのは、この人にはないのか。
「それとも、ガキどもには、優しくしてやろうという気持ちもないのかな？」
これにはさすがにムッときた。カヲルはにやにや笑っている。
薫は憤りながら立ち上がって、カヲルを指差した。

「手伝うわよ！　院長が病気なんだから私だって役に立ってみせるわよ！」
そんな薫を無視しながらカヲルは腕時計の時間を見ている。
「あ、やべ。飯作る時間だ。おまえ、料理は出来るな？」
この人は本当に人の話を聞いていない。もう、ムカつくのを通り越してあきれかえった。ため息が出る。
「……。まあ、お母さんと二人暮らしだったから、料理は一通りできるよ」
その言葉を聞くと同時にカヲルは立ち上がった。ついてこいというように顎で指図をする。
……本当に、どうしてこんな人に会いたいと思ったのだろうか……
なんだか、自分が悲しくなった。

廊下はしん、としていた。元は教会だ。当然か。
遠くで子供達の賑やかな声が聞こえる。二人は静かに調理室へと向かう。
「そういや言うの忘れてたけどな。俺の名前、名字で呼ぶのはやめてくれ」
カヲルが突然言った。
「名字、嫌いなんだよ」
自分の名字が嫌い、とは一体何なんだろうか？
だけども深く聞いてはいけない。そんな気がした。彼はまだ私に隠している事が色々あるに違いない。……少しずつ教えてもらおう。カヲルくんの事。
「わかった」
薫は素直に頷いた。それになんだか少しだけ親密になれた気もするし。

「じゃあ、私の事も『おまえ』って止めてよね」
カヲルは振り向き、眉間にしわを寄せた。ちょっと、その態度はどうかと思う。
そのまま前に向き直り、足を進める。無視を決め込むようだ。
なんだか、いちいち反応を気にして怒っていたら体力が続かない気がする。そのうちに『おまえ』呼ばわりは無くなる事を期待することにした。
めげない、めげない。

そのうちに調理室へと辿り着き、カヲルは扉を開けた。そこには小学生五、六年生くらいの男の子三人がすでに準備を初めていた。
「あーカヲル先生、女連れ～」
三人がはやし立てるように騒ぎだした。その子達の頭をカヲルは殴っていく。
「五月蝿い。黙れ。飯作らねーぞ」
ここの料理は当番制だそうだ。小学生低学年から少しずつ覚えていくらしい。
「こいつは、今日からここを手伝ってくれる……薫ねーちゃんだ」
「え、カヲル先生と同じ名前なの！？　運命だね！　先生！」
また一人の少年が殴られた。見た目からやんちゃそうな少年たちだなあ。
「こ、こんにちは」
薫は急に決まった手伝いに、多少戸惑いを感じながらもその少年達に笑顔で挨拶をした。
「よろしくね。薫ねえちゃん！」
口々に笑顔と挨拶が零れてくる。どうやら歓迎されているようだ。少し安堵する。
熱烈な歓迎を受けた後、早速料理に取りかかった。
薫は母子家庭だったので、料理は主に薫がやっていた。自己流ながら出来る方だと思っていた。が、カヲルの手際の良さに胆を潰し

た。
「とろくせーぞ」
と言われるくらいだ。少年達も、慣れた様子で準備をしている。
……これは……負けられない！！
特技は料理と言っていただけに、これでは洒落にならない。
今日のご飯はコロッケだそうだ。子供達が好きそうなメニューである。ただ、やっぱり男料理というのだろうか、味付けなどは適当に扱う。
「駄目よ。ちゃんと下味を付けてからね。あと大きさは均等にしないと火の通りがバラバラになっちゃうから」
多少のアドバイスを加えて、なんとか二十三人分作ることができた。
しかし、大人数のご飯を作るのは大変だ。カヲルはこれを毎日続けてきたのか。

……ん、しかし、二十三人分？
しっかり自分の分まで含まれている。
ここで薫が食事を取る事はもう決まってしまったようなものだ。
薫は苦笑いしながら、食堂で食事の準備を始めた。あちこちから子供が集まってきて、手伝ってくれる。そのつど自己紹介をしながら挨拶をする。自然と笑顔になった。
カヲルがけだるい目をしていないのは、この為か。不思議と元気を貰えた。

「よーし、飯にするぞ」
カヲルのかけ声がかかる。しかし、その後に沈黙が流れた。気まずそうにカヲルは頭を掻いた。
「……。ユキ、いつものやつを頼む」

近くの高校生の女の子に声をかける。そして彼女は食事のお祈りの言葉を唱え始めた。
……しばらく住んでいるはずなのに、お祈りを覚えていないのか！

食事中、一番五月蝿かったのはカヲルだった。
「ぎゃーぎゃー騒ぐな！」とか、「箸の使い方がへたくそ！」とか、叫び倒していたのだ。笑ったのは、嫌いな食べ物の前でぐずっていた子に「俺様が作った飯が食えねえってのか」と本気で脅していたことだろうか。その子は怯えながら食べたが、結局「おいしかった」と笑顔で返していた。するとカヲルは笑顔で頭を撫でるのだ。
カヲルの別の一面を見た気がする。
法学部なんて勉強しないで、このまま保父さんになってもいいのではないか。なんて思ってしまった。
薫といえば、女の子達の輪に連れて行かれ、彼氏はいるのか、とか初デートはいつしたかなどと、質問攻めにあってしまった。残念な事にあまり質問の答えは出せなかったが。院長は自室で食事を取っていた。

そんなこんなの食事を終え、子供達を各自の部屋へとカヲルが強制的に押し込み、今日の仕事は一段落したという所だろうか。

「大変だねー」
施設の屋上で今は二人だ。
「あいつらといると、体力がいくつあっても足りん」
そう言いながらもカヲルは楽しそうに見えた。いつも斜に構えて

いたカヲルとは全く違う。
「充分保父さんになれそうだよ。勉強したら？」
笑いながらカヲルに提案してみる。「馬鹿野郎」と一喝されてしまったが。
少しの沈黙が続いた。
なんだろう、この沈黙は嫌いじゃない。
薫は空を見上げる。ここは高い建物が少ないので空が広く見える。星が瞬いているのがみえた。
「……そういえば、カヲルくんのあの能力は、今は抑えているの？」
あの能力とは、カヲルには人と触れるとその人の考えている事が流れ込んでくる。というやっかいなものだ。今はコントロールができるようになった。とは言っているが、こんなに大人数相手で大丈夫なのだろうか。
「ああ。大丈夫だ。気を許さない限り流れ込んではこないようにしている」
「そう、良かった」
薫はちょっと試したくなった。今は気を許しているのだろうか。カヲルも今隣で同じく夜空を見上げている。清々しい表情。
薫はカヲルに触れるか、触れないかの微妙なところで彼の腕に自分の肩を触れさせてみた。そして、今日の楽しかった充実した気持ちを思い返して脳裏に浮かべてみる。
……微かにカヲルが笑った気がする。
こういう能力の使い方なら、いいよね。言葉にしなくても楽しかった気持ちが伝わるのって便利だな。
「……言葉にしたほうが、より一層感情がこもるっていうのもあるぜ」
カヲルが空を見ながら、ぽつりと言った。
「な、なんでそこまで伝わってるの？」
焦ったように薫が言った。
「そりゃ、触れたまんまだったら、そこまででも伝わるさ」

笑いながらカヲルは、触れていた薫の肩を軽く叩いた。確かにそれはそうだ。
薫も笑った。なんだか今は素直な気持ちになれてる気がする。
「本当に、おまえは昔から変わらないな」
「え？」
カヲルは思い出すように少し遠い目をした。そして、目の前の薫の瞳を見つめる。
「昔のおまえも、同じ事言っていたよ。『いやなことも、伝わってくるかもしれないけど、同じくらい楽しいきもちもつたわってくるはずだ』ってね。あの5歳くらいの小さいガキが一生懸命言葉を繋げてさ」
そんな事を私は言ったんだ。全然覚えていない。
「覚えていなくても、俺は覚えてる。……おかげで世界が変わった気がした」
カヲルの顔が目の前にあった。瞳になんだか吸い込まれそうだ。
……と、その瞳が違う方向に鋭く動いた。
「おまえら、さっさと部屋で寝やがれーーーー！」
子供達がドアから飛び上がるように逃げ出した。
「わーーっカヲルせんせいが、いちゃいちゃしてるーっ」
その後の大騒ぎは、言うまでもない。

4　暗闇の鴉

薫の生活は変わった。

大学を休む。という事はさすがにしなかったが、大学を終えるとまっすぐに施設に向かった。バイトはしばらく勉強に専念するということにして休みを取った。

大学は毎日あるわけではない。休み前日には泊まりがけで、施設で過ごした。

施設にも大分馴染んできた。

カヲル先生と、薫おねえちゃん。という風に子供達は二人を区別して名前を呼んだ。まさに小さい子供たちから思春期の少年少女たちまで居たが、皆快く薫を迎えてくれた。

毎日があまりにも大変で、楽しくて、すっかり夢を見なくなっていた。疲れ過ぎて熟睡しているのだろう。

カヲルの夢のことは、きっと偶然だろう。ということで自分を納得させた。

……だって、カヲルはいつもにも増して元気で、明るくて、ハツラツとしていたから。そんな彼があんな事をするハズない。

そう、思っていた。

だから、この日の夢は衝撃だった。

気がついたら、薫は真っ暗な闇の中に居た。
足元が何か濡れているような気がする。べちゃべちゃした感触が気持ち悪い。
それに、この匂いはなんだろう？　鉄の匂い？

真っ暗な闇の中、ただ闇雲に歩いていた。
気付くと、少し先に赤黒い光が見えた。

人が、居る？

少し近づいてみる。そして赤黒い光で、自分の周囲が少し見えた。足元の液体はあそこから流れてくるようだ。薫はかがみ込み、その液体に触れてみた。どろりとした、粘着質なモノ。それはよく見ると血だったのだ。
「ひぃっ！」
薫は叫び、後ろへ退いた。だが、其処にあるのはただの闇。
光の下には女の子が踞っている。薫のことなど気付いてもいないかのように。

ただ、手首を眺めて呟いていた。
「消えてしまえばいい。消えてしまえばいい……」
まるで呪文のように繰り返していた。その手首からは血が溢れている。この床の血は彼女の血か。
「消えてしまえばいい。私なんて…。死んでしまえばいい！」

何かが割れる音がした。そして彼女を中心とした爆風のようなものを感じた。

その子の心か、この世界か。

今、何かが、壊れた。

5　硝子の破片

薫は携帯の音で目が覚めた。
「もしもし……」
寝起きなのでガラガラ声だ。そして夢の影響からか、身体はけだるく言う事をきかない。枕元で鳴った携帯を取るのが精一杯だった。
頭が働かない。ここは何処？……ああ、自分の部屋だった。昨日、施設からカヲルに送ってもらったんだっけ。
『なんで、おまえがあの夢の中に居た！』
携帯の相手は、そのカヲルだった。朝からそんなに怒鳴らなくても……。
「あの夢って、今日の……？」
まだ身体の半分が夢の中のようだ。薫は頭を振って眠気を覚ます。
『そうだ。今まで見ていた夢だ。あれは狭間にやってきた奴の夢だ。どうしてそんな夢の中に侵入していたんだ』
わけがわからない。
ただ、カヲルが苛立っているのは感じる。
寝ぼけた頭の中を整理しながら、一生懸命説明はした。
「私もわからないよ。夢をみたらアレだったの……。私、あの女の子の夢の中に入っていったってこと？」
カヲルは無言だったが、焦りのようなものは携帯ごしに伝わってきた。
一体なんだというのだろう？　彼はどうしてこんなに、慌てているのか。
『……わかった。携帯で説明しづらいから、今日大学のあの準備室に行く。おまえもちゃんと来い』
それだけ言うと通話が切れてしまった。

カヲルの行動、言動はここ数週間で大体把握できている。
あの無茶苦茶ぶりはもう慣れてしまった。
薫は怒る事無く携帯を置き、急いで大学に行く準備をはじめた。

「……ったく。なんだっておまえが、あそこに居たんだ」
図書室の奥にある準備室の中である。此処の住人が帰ってきた。
あいかわらずの態度だ。まあ、施設の中だろうが、準備室だろうがカヲルにとってはどちらも関係はないのだろうが。
カヲルの座っている椅子に向かって、薫はもうひとつの折り畳み椅子を引っ張りだし、そこに腰掛けた。
しかし、何故こう叱られている気分になるのだろう。
ただ夢を見ただけなのに。
「あの夢がなんだっていうの？」
薫は不思議でならない。前に狭間で見た夢の中に入り込んでいたらしいのだが、カヲルはそれを狭間から見ていたそうだ。
「その夢が問題だ。あれはかなり精神が参っている奴だろうな。それにおまえと波長が合ってしまったんだろう。このままじゃ、巻き込まれるぞ」
巻き込まれる。という言葉で初めて、何かに関わってしまった事に気付いた。
「ああいう鬱は周りに影響を与える。おまえがあの夢と同調しつづけると同じような精神状態になっていく。だから危険だと言っているんだ」
全くどうして波長があってしまったんだ。なんてカヲルはぶつぶ

つと文句を言う。
いや、それはどうしようもないと思うんだけど。
「じゃあ、解決策は？」
「夢を見るな」
カヲルはスッパリと言った。
それはいくらなんでも無理じゃないかな…。

それに薫には同調してしまった理由に心当たりがあった。
「あの子、鬱……だよね」
カヲルは器用に眉を片方上げ、なんだ？　という表情をする。
薫はうつむき、左手首を握りしめた。
「現実もリストカットしているかもしれないよね……」
「その可能性は大いにあるな。あそこまで鬱になっているんだ。実際しているだろうな」
「気持ち、分からなくもないんだ……。鬱になるっていうのは理由があるにしろ、無いにしろ、心が弱ってしまったんだよね。私も経験があるの。心が弱ってしまう事……」
思い出したくもない出来事が薫の脳裏に浮かぶ。
心の中の箱に閉まっていた思いは、カヲルとともに開いてしまった。薫の表情は少し困ったような、泣きそうな、微妙な顔になっている。
「昔、中学の時かな。先輩にいじめられてね。あんな心境になった事があるんだ。消えてしまいたい。私なんかいなくなればいい……って」
そう言って左手首に付けていた腕時計を外した。
そこには、深いリストカットの痕があった。
「おまえ……」
カヲルは唖然としたように、言葉を止める。

「今はもちろんしてないよ。だけど、あの当時は心が弱かったんだ。自分を痛めつける事で自分の存在意義を確認していた……のかな。血を見る事で安心するとか変な考えがあったんだ」
「馬鹿野郎だ」
カヲルは言った。目が怒っている。手に拳をつくって微かに震えている。
「おまえが男だったら、殴ってるぞ」
そのカヲルの態度に薫は微笑んだ。
「そう言ってくれるの、嬉しい。あの時は自分が独ぼっちな気がしてて、誰も私を見てくれない。そう思い込んでたの。でもね、お母さんがリストカットする私を見つけてね、私を殴って一緒に泣いてくれたの。友だちにも叱られてさ。あれは自分を痛めつけるだけじゃなくて、周りも悲しくさせる行為なんだよね」
少し気まずい空気が流れた。
だけど、しかたがない。私がした事は自分を傷つけるのではなく、周りの人を傷つける行為なんだ。
「それで、目が覚めたんだ。なんて自分は閉鎖的になってたんだろって気付いた。私にはお母さんがいて、友だちもいる。それなのに勝手に孤独になっちゃってさ」
薫は傷のついた手首をぎゅっと握り、頭を垂れた。これは戒めだ。自分の。でも、あの子はまだ立ち直れるのかもしれない。薫の心になにかが芽生えた。
立ち直れるということを伝えたい。ひとりじゃないんだよ、と言いたい。
私と同じ事を繰り返してほしくない。私があの夢に同調してしまったのは偶然で終わらせたくない。
「同調してしまったのには何か理由があるのかもしれない。立ち直れるよってあの子にもそれを伝えたい。自分は独りじゃないよってちゃんと教えたい」
薫は垂れていた頭を持ち上げ、目の前にいるカヲルを見つめる。

右手はもう手首には当てられてない。力強く自分の両手を握りしめた。
赤の他人かもしれない。だけども同じ事をしてきた自分がいる。そしてそれを乗り越えてきた。余計なおせっかいだとは分かっている。けれども放っておく事は出来ない。
「助けたいの」
はっきりと薫は言い切った。いつものどこか頼りない薫ではない。
カヲルは目を反らして眉を寄せながら髪をガリガリ掻いた。
「どこのどいつかわからない奴だぞ。意識下の世界だから何処にいるかもわからない。それを助けようっていうのか」
薫は頷いた。東京だろうが、大阪だろうが行って助けてあげたい気持ちは変わらない。一言だけでもいい、伝えたい。
その態度を見て、カヲルは諦めたのだろうか。ため息をついてから躊躇いがちに言葉を発した。
「……あの制服は、知っている。施設の子らが行っている学校の奴だ」
薫の表情が明るくなった。
「ただし」
カヲルは薫に指差した。
「俺の目の光っているところで行動しろ。隠し事は許さない」

薫は不思議でたまらなかった。どうして、カヲルは薫を手伝ってくれるのだろうかと。
今、二人は一緒に電車で施設へ向かっている。外はもう夕闇が迫っていた。

人がほとんど乗っていない電車で揺られながら、薫はぼうっと考えていた。
「ねえ……」
隣でカヲルは腕を組みながら眠っているようにもみえる。静かにしておいたほうがいいのかな？
「……俺の目の届かない所でごちゃごちゃやられても、嫌でも目にはいる。例えば狭間とか。そんなところで五月蝿くされたら、俺がゆっくりできない。それだったら最初から関わっていたほうが楽だからな」
質問をする前に答えられてしまった。しかも俺中心。まあ、カヲルらしいけど。
ふふっと薫は笑ってしまった。その態度にカヲルは不満だったようだ。目をつぶりながらも片眉をくいっとあげて眉をしかめている。
「いや、カヲルくんらしいなって」
前回もだけども、カヲルはなんだかんだ理由をつけながらも薫を手伝ってくれた。確かに夢の中で私とあの女の子がバタバタしていたら、カヲルとしてもうざったいのだろうが。でも、カヲルはきっと優しいのだろう。本当はあの女の子が気になってしかたなかったに違いない。
施設でのカヲルを見ていたら、そう思える。
あそこでの生活を知らなかったら、きっとカヲルのことをもっと違う見方で見ていただろう。口が悪いし、態度も悪い。怖い人かと思ったかも。
隣のカヲルは軽い寝息を立て始めた。本当に眠ってしまったようだ。薫はまじまじとカヲルの顔を眺めた。
本当に端整な顔立ちだなぁ。長い睫毛にのびた鼻筋、薄い唇。髪の毛はまるでパーマをあてたようにクルクルだ。これが天然なんて、誰も思わないだろうな。
これで態度があれじゃなかったら、もっとかっこいいのに。
電車は、夕闇に吸い込まれていくように進んでいく。

カヲルは夕食後、例の女の子と同じ学校の子供たちを呼び寄せた。中学三年の真弓、中学二年のりえと、良太。そして一年生のちかの四人だった。

この子たちも辛い過去を持っている。真弓は小学生のときに交通事故にあい、両親を失った。一人っ子で親戚もいなかったので此処に来る事になった。

りえは父親と死別。母親は病弱でしかたなくりえを預けた。だが毎週のように会いに来る。良太も火災で、ちかも同様に両親を失っている。

だが、それでも彼らは明るかった。ここの生活は合宿のようだ、と笑っている。だけど、ここまで立ち直るのにどれだけかかったのだろうか。

四人は意味もわからず、食堂の椅子にちょこんと座っている。その前にカヲルが教師のように立っていた。

「おまえらにちょっと聞きたくてな。…学年はわからないんだが、黒のストレートの髪で、そう、薫くらいの長さだな。気の強そうな細身の女の子を捜しているんだが」

「カヲル先生、それじゃわかんないよ」

良太が口を尖らせて言った。確かにその通りだ。だけど、手がかりがない。過去の薫の経験が頼りだ。

「あ、たぶんね、いつもカーディガンか何か羽織っていると思うんだけど」

これも薫の経験だ。リストカットしている子はその傷跡を隠したがる。だが、心のどこかで気付かれたいという願望があるのからか、夏でも目立たせるかのように羽織れるもので隠している場合が多い。

「この暑いのにー？　いたっけ？　そんな子」

ざわざわと四人が口々に言い合う。学校は人数が多いから捜すの

は難しいか。
「ねえ、カヲル先生たち、なんでその女の子を捜しているの？」
真弓が当然の疑問をぶつけてきた。薫は言い訳を考えていなくて焦ってしまったが、カヲルは平然とあたかも本当にあった出来事のように薫を指差した。
「あの学校の近くで、このどんくさいねーちゃんがその子とぶつかってよ。持ってた荷物をぶちまけたらしいんだ。そのときに一緒に拾ってくれたらしいんだが、その女の子のノートを間違って持ってきちまった。返してやらないとな」
ちょっと、どんなどんくさい人扱いをするの？　しかもみんなに妙に納得されてしまった。それって、すごく失礼な気がするよ。みなさん。
だけども、違うとも言えずに薫は黙ってしまった。夢で会ったなんて言っても信じてもらえないもんね……。
「気の強そうな……あの子かな、綾ちゃん」
二年生のりえが閃いたように呟いた。同学年の良太が頭を捻る。
「誰だよ？」
「うちのクラスの木戸綾ちゃん。いっつもカーディガン着て、暑くないの？　って聞いても全然平気って言うんだよね。ほら、ブラスバンドの次期部長の子」
ブラスバンドと聞いて他の女の子たちも頭に浮かんだのだろう、ああ、そういえば。と答えが出てくる。ブラスバンドは大勢の前に出る機会も多いのだろう。
「あー、あのキレイな子かぁ！　そういえばいつも羽織ってるな」
良太がにやにやしながら言った。この子、カヲルに影響受けてそうなリアクションだなぁ。キレイな子と言って、他の三人の女の子は良太に睨みをきかせた。「おお、こわ」良太が仰け反るように言った。
「写真、ある？」
薫は焦る気持ちを抑えて、ゆっくり呼吸しながら聞いた。すると

りえが集合写真を持ってくるといって出て行った。
「薫ねーちゃんもどんくさいなぁ」
良太は笑いながら頭を掻いている。うう、バカにされてる。違うのに……。
りえはすぐに戻ってきた。そしてクラスの集合写真を見せてこの子と指した。
確かにあの子だった。
心なしか、覇気がないように見える。最近撮った写真なのだろう、みんな半そでの制服なのにも関わらず、彼女はその上にカーディガンを羽織っている。
「最近元気がないような気がするんだよね」
りえがぽつりと言った。
「聞いても、何にもないって言うんだけどなんか暗くて。次期部長に選ばれたプレッシャーかなって思っているんだけど」
「この綾ちゃんとは仲良いの？」
「うん、けっこうしゃべるよ。仲良し。私も次、演劇部の部長だし、そんなノリでかなー」
うーん、これからどうやって彼女に近づこうか……。名前は分かったけど、こっちは大学生だし、ノート私から返すって言われたらそれまでだし。
そう薫が考えていた時だった。同じく黙って考え込んでいたカヲルが思いついたように言葉を発した。
「もうすぐ七夕だろ。うちのガキどもがそわそわしてるんだよな。なんかイベント考えないとって思っていたんだが。……そのブラスバンド、うちに呼べないかな」
薫はハッとした。なるほど。ブラスバンドごと呼べば、次期部長の彼女に接触できることになる。
「まあ、それには、院長とその顧問とおまえ達の許可が必要なんだがな」
薫はカヲルの横顔を見上げた。院長と、顧問の許可はわかるけど、

彼らの許可？
周りを見渡した。そして彼らの表情を見て納得した。
そうか、彼たちは乗り越えたといっても、施設にいる事実を友人たちに教えていない場合があるのだろう。やはり、普通ではない事実を知られるのは勇気がいる事だ。
しばらくの沈黙が食堂内に広がった。
そして一番最初に口を開いたのは、一番綾と仲の良いりえだった。
「私はいいよ。別に知られたくないって事じゃない。ここの生活楽しいし。逆に自慢しちゃうかもね」
それに続いて、良太も真弓もちかも賛同した。
ここの子供たちはなんて素晴らしいのだろう……。薫は鼻につんとくるものを感じた。
「じゃあ、私は顧問の先生に聞いてみるよ」
そう言ったのは、年長の真弓だった。続いてりえが綾ちゃん本人に許可をもらうと言った。
「院長に提案してみる。あの人の事だから喜んで許可するだろう」
カヲルが言った。
「なんか、お祭りを企画するって楽しいね！」
笑顔で立ち上がったのは、ちかだった。

6　空の一握り

なんだか、大事になってきたなあ。

薫は施設での自分にあてがわれた部屋で大きな息をついた。

私のわがままで、あの綾ちゃんと話したい。という事がこんなに大変な事になるとは。

そういえば、カヲルとこの後をどうするか相談しなければ。私が勝手に話を進めたら怒るって言っていたのは、向こうだもんね。

薫は椅子から立ち上がると時計をみた。もう十一時だ。だけどもカヲルだったら起きているだろう。自分も風呂あがりでキャミ姿だが、毎朝素顔も見られているし、まあいいか。

カーディガンを羽織るとドアを開けた。静まり返った廊下が長くのびている。ここは二階で女の子たちの部屋だ。階下に男子達とカヲルがいるのだ。

物音を立てないように、そうっと階段を降りた。さすがにここまで静かだと怖いものがあるな。

一番大きな入口から近い部屋がカヲルの部屋だった。響かないように、コンコンとドアを叩く。すぐ静かにドアが開いた。

カヲルが無言のまま、中に招き入れる。

部屋は薫の部屋と同じ造りだった。勉強机があって、ベットがある。そして衣装棚。それだけのシンプルな部屋。昔ながらの石造りの建物なので趣がある。

「来る頃だとは思っていたけどな」

カヲルも風呂上りなのか、髪の毛がまだ濡れている。本当にくるっくるの髪の毛。

「あいかわらず、パーマみたい」

その髪の毛に思わず触れてしまった。黒い艶のある髪はまるで黒曜石のようだ。

「好きでこうなったんじゃない」
「うらやましいな。私もくせ毛風パーマとかにしたいんだけどなぁ」
薫の髪は細く柔らかくてパーマをあててもすぐにまっすぐになってしまう。髪の毛アレンジがあんまりできなくて、肩あたりで切ってしまった。
「おまえは、そのまんまでいいんだよ」
カヲルはくるりと後ろを向いて肩にかけてあったタオルで髪をぐしゃぐしゃと無造作に拭いた。あれ、これって誉めてくれたのかな？
「ベットの上にでも座ってくれ。今後の事だろ？　相談に来たのは」
「うん」
素直にベットの端に座った。この部屋には座るところがないので当然そうなる。
「院長先生は？」
「ああ、全然大丈夫だった。楽しそうだから是非来てもらって欲しいってさ」
カヲルは勉強机の備え付けの椅子に使ったタオルを背もたれに掛けた。その椅子に自分も座る。
「これで向こうの許可が下りたら、表向きは保護施設にボランティアにくるブラスバンドってことになるな」
本当は、ただ綾という子の、心を知りたいだけなのに。
どんどん話が大きくなってしまったな。
「大事になりすぎて、動揺しているんだろう？」
え、離れているのに読めるの？
「おまえは表情がわかりやすいんだよ。心配するな。七夕に何かイベントをしたいというのは本当の話だったんだ。いっつもだったら、ボランティア団体に頼んでいるんだ。ただ、毎回一緒で面白くねぇなって思っていたところだったんだよ」
笑いながらカヲルは細かい内情を話してくれた。しかしながら、表情で考えている事を読まれるのは我ながら単純すぎて情けない。
「これからは向こうが許可下りたらの仮定の話になるが、たぶん、

細かい打ち合わせを何回かすることになるだろう。綾という子は次期部長なんだろう？　たぶん一緒に来る事になると思うんだが……」
「そこで私が親しくなればいいのね？」
「まあ、そう都合よくいけばね」
カヲルは頭をガリガリ掻いた。考え事をするときの彼の癖だ。
「例えば、おまえが知らない人に悩みがありますか？　って突然聞かれても素直に答えるか？」
薫は唸ってしまった。確かにそれは唐突すぎて警戒してしまうかもしれない。
「直接傷を見てしまえば、簡単なんだがなあ」
「めくりあげろっていうの？」
「そうは言わない。だが、他の人に見られたら本当の事を言わざるおえないだろ」
それは、本当だ。私の過去も母に傷を見られたから打ち明ける事が出来たのだから。
「難しいね……」
人の弱い部分を暴く行為を私たちはしようとしているのだ。私は嫌われてもかまわない。だけども他の人たちには迷惑はかけたくない。特にりえと綾は仲が良いのだ。友情に亀裂でも入れてしまったら取り返しがつかなくなってしまう。
薫が俯いて考えていると、カヲルが薫の横に座った。ぐいっと薫の顔を持ち上げる。
「ただな、おまえが伝えたいという思いや言葉は強力な力だ。言葉というのは、語源は「ことのは」……詳しくは言霊と言われるくらい力をもっている。それ自身が力の元となるほどのな。おまえは言葉を力に変えるその力をきっと持っている」
突然顔を持ち上げられ、目の前にカヲルの顔があって薫は動揺してしまった。おかげで言葉の内容を全然捉えられなかった。
「こ、ことだま？」
「そうだ。ことだまだ」

カヲルは重要な事を言うたびに、こうやって顔を近づける。これだけはびっくりしすぎて慣れない。顔がじわじわと真っ赤になっていくのがわかる。
その時、遠くで人の走る音が聞こえた。だんだん近づいてきた。
カヲルと薫はその足音のほうに顔をむける。こんな時間に誰が起きていたのだろう。
その足音は、カヲルのドアの前で止まった。
ドアが突然開き、りえが泣きながら現れる。
カヲルは薫の顔から手を離したが、遅かったようだ。
「カヲルせんせ……え、ええー！！！　ごっごめんなさい！！！！！
……いや、それどころじゃなくて！　大変なの！　院長先生が咳が止まらなくって、大変なの！」
りえは色んな事に対してパニックをおこしたようだ。
カヲルと薫の事は勘違いしているらしいのだが、どうやらそれどころではないらしい。院長に異変があったようだ。カヲルの表情が変わった。すぐに立ち上がるとりえの元に駆け寄った。薫も動揺をおさえつつ、後を追う。
「院長先生がね、咳が止まらなくなって、血が、血が！　先生早く！」
三人は院長の部屋に駆け出した。

救急車が到着した。
院長が担架で運ばれていく。カヲルが同乗するようだ。
「薫は残って子供たちの面倒をみるように。子供たちに不安を与えるな。大丈夫だ。この人はもとから喘息もちなんだ」
救急車の前には救急車の音で起きた子供たちが群がっていた。その子供たちを抱きしめて薫は頷いた。
「わかった。ちゃんと寝かせておくから」
横でりえが泣いている。薫はりえの頭も抱えた。その姿を見てカヲルは安心したようだ。救急車の中に入っていく。車は素早く走り

出した。
「大丈夫。大丈夫だからね。みんな、戻ろう？」
薫は優しい声で皆を落ち着けるように言った。

薫は一人一人をゆっくりと寝かしつけていった。中には「院長先生死んじゃうのかなあ」など不安げな言葉を言う子もいたが、「先生は皆を置いていった事ないでしょ？」と優しく言うと素直に布団の中にもぐりこんでいった。
隣で一緒に見回っていたりえが泣いている。薫の服の端を掴んでボロボロ涙を流していた。
「院長先生にね、相談したいことがあってお話していたの。そうしたら突然血をね……」
途中から言葉が出てこないようだ。そんなりえを優しく頭をなでる。
「ほら、カヲル先生も言っていたでしょ。喘息もちだって。最近体調が良くなかったじゃない？　だからちょっと悪化しちゃっただけだよ」
うん、うん。と頷きながらも涙は止まらない。しかたがない。だってりえは父親も同じような状態で運ばれ、そのまま息を引き取ったのだ。その過去を思い出してしまったのだろう。
「りえちゃん、お父さんを思い出したんだね。怖いよね。わかるよ。おねえちゃんもね、お父さんを亡くしているから」
ちょうど今食堂の前を通っているところだった。その中にりえを招き入れて2人椅子に座った。
「おねえちゃんのお父さんは、私の目の前で殺されちゃったんだ」
驚いたようにりえが目を見開く。
「ずーっと私、ショックで記憶を失っていたの。でも犯人に追いかけられる夢を見たり、ＴＶでのそんなシーン見れなかったり、トラ

ウマになっていたのね」
「どうやって、忘れられたの？」
薫は首を振った。
「忘れてないよ。今は全部記憶を取りもどして、犯人も捕まってる。けど、その出来事は目に焼き付いて離れない。だから祈るだけしかできないの。同じ事がもう二度と起きませんようにってね。りえちゃんも一緒に祈ろう？　院長先生がお父さんと同じ事になりませんようにって。それだけしか、私たちには出来ないから」
ぱちんと薫は自分の頬を叩いた。
「ごめんね。私はうまく慰めることが出来ないや」
そういってりえの手を握った。こんなことで、あの綾を慰める事なんか出来るのだろうか。
俯いていると、りえが逆に手を握り返してきた。
「ううん。おねえちゃんありがとう。私、祈るよ。院長先生が良くなりますように」
そう言うとりえは赤い目をごしごし擦り、力強く立ち上がった。
「礼拝室行ってくる。あ、あとカヲル先生のことは秘密にしておいてあげるね」
ウインクをすると、するりとりえは食堂から出て行った。
しまった。りえにカヲルの事を誤解されたままだった……。

やはり薫も院長の事が不安でベットの上でぼうっとする事しかできなかった。
ただ、少し前にカヲルから携帯で連絡があり、喘息と肺炎を引き起こしていたらしい。院長は何も語らずそこまで体調を悪化させていたのだ。急遽入院が決まった。カヲルは手続きをしてから帰ると言っていたが……。
カヲルが帰るまで起きておこうと思っていたが、薫のまぶたは自然と降りていった。

闇だった。

ああ、あの子の夢だな。と、どこかで客観視している自分が思った。

今、闇の中に立っている自分と、それを遠くから眺めている自分。夢ではよくある事だ。

ひたひた、と闇の中を歩いていくとやはり綾がいた。

頭を下げて脚をぺったりと地面に投げ出している。そしてやはり手首を切り刻んでいるのだ。

「消えてしまえ、私なんて、消えてしまえ……」

呪文のように繰り返される言葉。カヲルの言う通り、毎回この夢を見ていたら、私まで鬱の気が移ってしまいそうだ。だけど、私にはカヲルがいる。引上げてくれる彼がいる。

けど、綾の心はひとりぼっちなのだ。

「ねえ、そんな事言わないで。消えてしまいたいなんて言わないで。どうしたの？　何があったの？」

綾の前に座り込んだ。見る間に服に綾の血が染み込んでゆく。

綾の目はうつろで何も見ていない。いや、見えていないのかもしれない。そして薫の問いかけも耳をかすめる事すら出来ていないようだ。

自分の殻に篭っているというのは、こういうことか。

それでも薫は自らを切り刻んでいる綾の両手を握った。夢の中のはずなのに、とても冷たい腕だと感じた。

「こんな事はやめようよ？　自分を傷つけても、悲しいだけだよ？」

綾は薫の止める手にもかかわらず、行為を止めようとしない。なんだか薫のほうが悲しくなってきた。

どうしてこんなに心が痛いんだろうね。
どうして、こんなに悲しいんだろうね。
自分を否定してしまうほど。

薫は膝立ちになり、綾を思いっきり抱きしめた。力いっぱい抱きしめた。
綾の行動は変わらない。だけど、かまわなかった。
あなたの事を心配している人はここにいるよ。私だけじゃない。
りえちゃんだって心配しているよ。
自然と涙が流れた。綾は泣いてなどいないのに、薫が泣いた。

しばらく綾を抱いていると、薫の視界の先にほのかに明かりが点った。
小さな明かりはだんだんとこちらに近づいてくる。
それはカヲルだった。カヲルはゆっくりと歩いてくると2人の前に立ち、薫の手を掴むと、ひっぱりあげる。
「……でも」
行きたくないと意思表示をしてみても、カヲルは何も言わず薫を綾から引き離す。
そして薫を促すと、自分も一緒に歩き出した。
離れる瞬間、綾と目が合った気がした。

そんな気がした。

7　流れゆく花びら

目が覚めると朝だった。
ああ、私あのまんま寝てしまったんだな。そしてまた綾の夢を見てしまったのか。
身体を起き上がらせると、布団が掛けてあった。
あれ？　私起きてるつもりで布団なんか被ってなかったのに。
「……くぁーっ」
なんともいえない間抜けな声が横から響く。

え。

横で誰か眠っている？
恐る恐る振り返ると、隣で眠っていたのはなんとカヲルだった。
背中を向けて丸まっていた。
えええーーーーーーーーー！！
思わず身を仰け反らせた。ぼっさぼっさのくるくる頭、だるそうな目。これはカヲル以外誰がいるというんだろう。
「なっ！　なんで私の部屋にいるの！？」
カヲルはかまわず伸びをする。あんたは猫か！
「ああ？　だっておまえ院長の報告しにきてやったら、鍵はかかってねぇし、俺が大変な目にあってるっていうのに気持ちよさそうにスヤスヤ眠ってやがるし、なんか見てたら、こっちまで眠気が……」
だからってこの部屋で寝る事はないんじゃないの！？
「部屋に戻るのがめんどくさくて」
確かに、ここの部屋は二階の一番奥で、カヲルの部屋は一階の奥だから面倒っていうのはわかるけど、デリカシーも何も無いのか！
ああ、本当にこの男だけは読めない……。
とりあえず、薫は着替えるからとカヲルを追い出し、プスプス怒

りながら朝の用意を始めた。
って、ちょっと待ってよ。私の寝顔、思いっきり見られたってことだよね。無茶苦茶恥ずかしいじゃない！　それに、この状況を何も知らない子供たちがカヲルが此処から出て行く所を見ていたらどういう反応になるんだろう。ぼさぼさだし。寝起き顔だし。
だんだんと、薫の顔が青くなってきた。
やばい。やばいぞう。
急いで薫はベットの上に置いてある携帯の時計を見る。七時。ちょうど皆起床の時間だ！
その時薫の背後から、廊下の外で女の子達が大きな黄色い奇声を発しているのが聞こえた。

……。
私は、もう知らないからね…。

薫とカヲルは奇異の目でみんなに見られながら朝食を取った。
気不味い。なにがどうしても、気不味い。
話は瞬く間に広がって、結局内緒と言っていたりえの誤解の話も織り交ざって、話は勝手に明後日な方向に盛り上がっていた。
この誤解は元はといえば目の前でのんびりとパンを食べているこの男にあるというのに。皆がにやにやしながら、こっちを見ている。
院長先生の入院の話は朝食前にカヲルから話がされた。静養も兼ねての入院ということで皆安心している。
その分、逆にこっちの話が盛り上がるのだ。
どれだけ院長先生の話で部屋に来た。と言っても信じない。なぜならりえの話も広がっているから。プラスアルファで最悪な状況だ。
なのに、この男は何もなかったかのように振舞っている。
こいつは天然なのか、意図的なのか……。
おかげで皆学校へ行くときまで、「先生たち、私たちがいないか

らってイチャイチャしないでねー。小さい子の目の毒だからねー」
とからかわれる始末だ。
薫は苦笑いをして見送るしかなかった。
「はあ……」
ため息をつきながら、門の前に座り込んだ。
「なにやってんだ。チビどもが待ってるぞ。院長がいないんだ。仕事が増えると思っておけ」
スタスタと門の中に消えていく。全く！　誰のせいで疲れていると思っているのよ！
「ちょっとねえ！　誰かのせいで誤解されまくってるじゃない！」
歩調の早いカヲルを追いかけて薫は駆け出した。
「そんなの放っておけ。すぐ忘れる」
「そんなのって言ったって、そう簡単に忘れるわけないじゃないの」
歩いていたカヲルが立ち止まった。そして薫の方に振り向く。
「別になにかしたわけじゃないだろ。それとも何か？　そんなに俺と噂になるのが嫌か？」
カヲルは眉をしかめて薫をみた。

え、怒った？

「いや、だから、変な誤解を生んじゃったら、ややこしい事になるんじゃないかって……。カヲルくんにも迷惑かなって思って」
機嫌が悪いカヲルに思わすしどろもどろになってしまった。何？
この状況は？　怒らせるような事、私、言った？
「別に俺には何の問題もない」
そう言うと、また施設のほうに向かって歩いていく。
なんなの？　今のリアクションは。
呆然と、薫はカヲルを見送った。

午後になり、昼寝の時間を年少者たちと取っていると、遠くで電話の音が聞こえた。
これは携帯の音ではない。施設の電話だ。カヲルが電話をとりにいく。
あれからカヲルは何も無かったかのように、子供たちと遊んでいた。小さい年少者たちは年長組が騒いでいることを理解していないようで、薫は安心した。
全員が眠ったところで、薫はカヲルのところへ向かう。
「……はい、私が代表の代わりの者です。七夕祭りの件ですね。はい。協力していただけると。」
薫が部屋に入ってきたのをカヲルは確認すると、電話の内容を分かりやすく復唱しながら聞かせてくれた。ただ、デスクの上に座り込んでいるのはどうかと思うが。
そう思いながら、自分は来客用ソファに座って、耳を澄ませた。
「コンクール前ですか。大変ですね。ええ、結構です。控えの生徒さんでも充分です。で、打ち合わせの話ですが、部長さんはコンクール前で忙しそうですから、次の部長さんで話を進めたほうがそちらにも負担にならないかと……」
いつものカヲルとは全然違う、丁寧な言葉使いだった。カヲルがこんな言葉使いをできるとは思わなかった。いっつもこんな口調ならいいんだけどなあ……。
「彼女もコンクール出場ですか。ああ、そうですね、次の部長としてのやり取りを覚えたほうが彼女の為にもなりますよね。今、うちの代表が体調不良で入院しておりまして、人手が足りない状態でして。来ていただけるなら、こちらも嬉しいのですが……」
それにしても、なんて誘導が上手なんだろうか。確実に綾を此処に呼び寄せるように仕向けている。
「はい、では時間が無い事ですので、明日の夕方でお待ちしております。……それでは失礼します」
静かに受話器を置いた。

「そういうことだ」
また、この人は私に対してはこんな調子だ……。詳しい説明は一切無しですか。
薫はめげずに、さっきの電話の話を復唱した。
「要は、コンクール前で忙しいからメインの生徒は来れないけど、控えの生徒が施設で演奏会をしてくれるということね。で、その打合せに綾ちゃんが来るって事でしょ」
「ああ、ご希望の綾だ。そこからどうするかはおまえ次第だがな」
暗にプレッシャーを与えてくるこの男を一度でいいから殴りたいっ……。
「明日、放課後に顧問の先生と一緒に綾が来る」
りえちゃん、それに真弓、良太にちか。教師たちは真弓たちの身の上を知ってはいるだろうが、りえはどうやって綾に話したのだろうか。すごく勇気がある子だな。
「明日は金曜日だ。ついでに泊まらせたりできたら、楽だろう？」
そこまでカヲルは考えていたのか。これはりえと作戦を練らなければならないな。
「わかった。相談してみるね」

金曜日は偶然にも薫の受ける授業は休講になっていた。
休講にならなくて大学に行ったとしても、絶対授業なんか頭に入らないだろう。もとから薫は休むつもりではいたが、しばらく学校に行くのは難しそうだから、安堵した。
夏前のテストはほとんどレポート提出なので、心置きなくサボれ……いや、休める。
なんといっても、院長が入院したのだ。少しでも多く手伝わなくては。
カヲルも忙しそうに動いている。だから薫は主に手のかかる小さい子供たちを相手にしていた。

夕方、五時頃、真弓とりえが帰ってきた。一緒に大きな身体の三十代の男性と、その男性に隠れるようにしている細身の綾を連れてきた。
薫が応接室に案内する。
ちらりと薫は綾を見た。やはり覇気がないように見える。黒いカーディガンを羽織り、手首にはちらりと白いものが見えた。おそらく大きなバンドエイドかなにかだろう。
綾は元気なそぶりで、仲のよいりえとおしゃべりをしながら歩いてくる。
「こんにちは、綾ちゃん」
にっこりと薫は微笑んだ。その顔を見て綾は一瞬驚きの表情を見せた。

な、なに？

その驚きの表情はすぐに消え去り、緊張した表情で挨拶を返した。
「この子は少し人見知りでしてね。これからの部長という仕事に慣れさせるように連れてきました」
横で顧問の先生がフォローした。
いや、薫が気になったのは緊張した表情ではなくて、その前に少し見せた驚きの顔だ。
何に驚いたというのだろうか。夢の中では彼女は自分だけしか見ておらず、私の顔など覚えているはずもないというのに。
応接室に招き入れると、中にはカヲルがすでにいた。いつもの洗いざらしのTシャツではなく、ノリのきいたシャツにズボン。ちゃんとした服装で待っていた。
そして応接用ソファに顧問と綾を座らせ、自分も向かいのソファに座る。
「真弓、小さい子供たちが遊んでいるから、面倒をみてやってくれ。まだ年長組が帰ってきていないんだ」

真弓はうん、と頷くと扉から外へ出て行った。それを見ていた顧問は感心したようにしゃべりだした。
「いい教育なさってますね。ここの施設出身の子たちは皆良い子ばかりでね。手をかからせないのですよ」
顧問は若干の肥満体系からか、常に汗をにじませハンカチで額の汗を拭いている。
「いや、これは僕の教育ではなく、院長の指導がいいのです。僕なんかはそのお手伝いをしている程度ですよ」
世間話を二人がしている間に、薫は四人分のお茶を用意した。カヲルは名刺をもらったり、自己紹介をしたり、施設の内容などを話していた。そして不安そうに座っている綾の後ろにはりえが安心させるように居た。
テーブルにお茶を並べると、薫はカヲルの横にちょこんと座った。なんだか場違いな感じがしなくもないが、私がいなければ綾の話は進まない。
「さて、七夕の演奏会の事ですけども」
薫が座ったところで、カヲルが話しを始めた。
「ああ、そうですね」
顧問の先生はハンカチを手放さずに綾の方に向いた。綾は無言で持ってきていたＡ４サイズの茶封筒からスコアブックを数冊取り出した。
「昨日お話があった時点で、この次の部長の木戸に話をしたんですよ。そうしたら、彼女今日の朝までにセレクションしてくれてまして。ここにあるのは何度か演奏した事がある曲ばかりなので、難しいということではないですな」
カヲルはそのスコアブックを広げてみた。「となりのトトロ」や「魔女の宅急便」他にも小さな子供でもわかるアニメのものも含まれていた。
「充分ですよ。七夕のお祭りを一番楽しみにしているのは、小学生以下の小さな子ばかりですからね」

頷きながら、スコアブックを返却する。
こうしてみると、本当にカヲルは保父さんみたいだ。素直に子供の事を考えている。
「……とはいえ、一応高校生もいるので、そうですね……まあよく練習曲などに使っている曲など……せっかくのブラスバンドだから行進曲あたりがいいかな？　最後のほうに一曲でも入れてもらえると、より盛り上がるのではないでしょうか？」
ほうほう、と先生は頷いた。
「それはいいですな。確かにうちには練習曲で毎日演奏しているものがあります。それをいれましょう」
つつがなく七夕祭りの話は進み、もう、先生は帰ろうかという雰囲気を出していた。
カヲルは薫の足を軽く踏んづけた。早く切り出せ。ということか。
「あ、あの。今日はせっかくの金曜日ですし、木戸さん、ここの施設を一日体験してみない？　りえちゃんも一緒だし、お泊りとか、楽しいと思うの？」
自分でも冷や汗がにじみ出てくるのがわかる。なんて強引な引き止め方だろう。
綾は困惑した顔で顧問をみたが、だるまさんのような顧問は「親御さんが良いというなら、一度お泊りしてみなよ」とすんなりと話を受け入れた。
「でも、明日も練習だし……」
「服は私が貸してあげるよ！　なんていったって此処に住んでいるんだから。みんなでワイワイするのも楽しいよ。一緒に遊ぼうよ」
りえがフォローを入れた。良かった。りえをここに残しておいて。
りえと薫の強引な手引きに綾はうん。と言うしかなかった。
では、と先生が立ち上がり、綾も親の許可を取りに電話を入れるということになってりえと一緒に出て行き、皆が席を外したときにやっと薫は体の力を抜いてひと息をついた。
「やれば出来るじゃないか」

横ではもうシャツのボタンを三つくらいまで外して、だらんとしているカヲルがいる。
「あれ、もう外しちゃうの？」
「息苦しくて、たまんねえ。俺には向いてねえよ」
シャツの隙間から見えたカヲルの胸元に、一瞬ドキリとして目を逸らした。
「ん？　顔が赤いぞ。風邪ひいたのか？」
おでこにカヲルの手が伸びてきた。予想より大きな手のひらに薫の顔はさらに赤くなる。
「ち、違う！大丈夫！！！」
身体を大きく仰け反らして、カヲルの手のひらを避ける。この人は本当に！！！
関係ないところで、急に優しくするのはどうかと思うんですけどっ！！
遠くからパタパタと走る音が聞こえてくると、やがて扉が開いた。
「ほらね。二人ラブラブなんだよ」
りえと綾だった。一体何の話をしていたのだ？

結局、綾はこの日施設に泊まることになった。
食事は小さい子たちを先に取らせ、年長組はゆっくりとることにした。だが、騒がしいのには変わりは無い。
そのにぎやかな様に綾は驚いていた。
「どうしたの？」
いつもと変わらない食事風景のりえが綾に聞く。
「いや、にぎやかなんだなーって。イメージと全然違う……」
「もっと皆暗いかと思った？意外とタフなんだよ。弱肉強食だよ～。食事なんか特に。好きなものの奪い合いだからね」
みんな大きな声で笑った。綾も笑った。でもふと寂しそうな顔に

なって、「私もそのうち……」と小声で言った。
「え？」
なにか重要な事を言った気がした。薫は綾に聞き返そうとしたが、綾は何も言っていないかのように、りえたちとしゃべりながらご飯を食べている。
「それより、一番びっくりしたのは、あのお兄さんだけどね」
カヲルの事を指しているらしい。確かにさっきの先生とのやり取りは紳士的なものだったが、今はいつもの服に着替えて、どなりちらしている。
まさに私が始めてここで食事をとった時のように。
それに対しても、また爆笑が起こった。確かに普段のカヲルの風貌では、クールなお兄さんに見えていたのだろう。だが、ここではそれは通用しないのだ。行儀がなってないのだの、食べ方が汚いだの。まあなんて細かい事。
「まあ、そんなカッコいい態度が出来るのはこのお姉ちゃんの前だけだって」
そう言うと良太が食器を持って逃げ出した。こら！　言い逃げか！
薫はテーブルに頭をコツンとぶつけた。
「……もう、違うんだよーー」

「違う事ないと思うんだけどな。私」
ザバンとお湯が溢れる音がした。場所は移動して、ここは女子風呂だ。
薫と、りえそして更衣室に綾がいる。
たぶん手首を隠したいのだろう。入るのに躊躇われている。
「恥ずかしいのー？　綾？　暗いからわかんないよー」
そう言われて、そろそろと綾が入ってきた。たぶん此処が一番のチャンスだろう。

「違う事ないって、どういうこと？」
綾に意識を集中してしまわないように、りえと話を続ける。
「だってさ、あのカヲル先生が人連れてきた事なんて一度もないんだよ」
「でも、それは院長先生が体調不良だったからって理由だし。それにカヲルくんはああいう人を驚かす行動が多くない？　もう、びっくりしっぱなしだよ」
「えーーーー？例えば？」
「ほら、重要な事を言うたびに顔を近づけてくるとかさ……、堂々と部屋乱入とか」
りえは難しい事を考えるような仕草をしたが、頭を振った。
「ないよー。そんな事絶対しないよ。そんなことされたら、りえ、先生に惚れちゃうよ」
「んーーーーー？」
今度は薫が難しい顔をした。いや、でもあれは無意識でとしか思えないんだよなぁ……。
「でも、確かにカヲル先生ってカッコいいよね」
口をはさんだのは綾だった。こんな女特有の会話だからか、少し打ち解けてくれたようだ。
「薫お姉さんはカヲル先生の事好きじゃないの？」
綾がズバリと聞いてきた。これは誰もが思っていて、誰も聞かなかった事だ。
薫は思わず口篭もる。
「……そうだなあ……あのだらしなくて、口が悪くて、意地悪じゃなかったらねぇ。……考えたかもしれないね」
それだけど、時々すごく優しいんだよね……。とは口が裂けてもいえなかった。
りえは会話が一段落すると更衣室に戻っていった。そして、薫と綾が残った。
少し、沈黙が広がる。

「……薫おねえさん、私会うの初めてですよね？」
「……」
夢の事を言おうかどうか迷った。だが、綾はそれを聞いてどう思うのだろうか。
「どこかで、会った気がするんですけど」
「きっと、私がぶつかった時だよ。ノート集めてくれたんだよ」
不思議そうな顔を綾はする。記憶にないのは当たり前だ。勝手にカヲルが作った話なのだから。
「その時にね」
薫は綾の腕を掴むと、湯船から持ち上げた。
「これ、見ちゃったんだ」
まだ、血が固まりきっていない傷口がそこにはあった。深々と皮膚は鋭い刃物でえぐられている。
綾は目を見開き、薫の手を振り解いた。
「これはね、自分だけじゃなく、周りの皆も痛い行為だよ」
彼女は何も言わず俯いている。
「私にも経験があるのよ……」
そう言おうとしたときだった。綾は背を向け、湯船から出て行ってしまった。
「待って、綾ちゃん」
「何にも知らないくせに！　他人のくせに！　放っておいてよ！」
言うなり、扉を閉めて出て行ってしまった。
湯船に一人、薫は取り残された。ぶくぶくと顔を湯に沈める。

火照った体で風呂場からの廊下を歩いている。しまった。少し湯船に漬かりすぎた。頭がくらくらする。
……わかっていた。拒否されるのは。
私だって、最初は見られるのも嫌だったはずだ。それを赤の他人

である私が突然言ったとしても、拒否されるのはわかっていた。
だが、それでも一言を言わなければ、次の言葉は伝えられない。
しかし、これがこんなに堪えるとは。
薫がふらふらしながら歩いていたら、ちょうど見回りをしていたカヲルと顔を合わせた。さっき変な話をしていたから、妙に意識してしまう。
「どうした？」
薫はふらふらの頭を起こして笑って見せた。
「大丈夫、ちょっとのぼせちゃっただけ……」
カヲルは何も言わず、腕を組みながら薫のその姿を眺めていたが、急に薫の腕を掴み、薫の部屋へと押し込んだ。そして鍵を閉める。
「前は鍵閉め忘れて、大騒ぎになったからな。……さあ、何があった？」
じっと薫の顔を見つめる。
駄目だ。そんな見つめられ方をしたら……。
綾の言葉で傷ついた心は薫の涙腺を緩める。
「拒否されちゃった……」
そう言うと、カヲルの広い胸元におでこをぶつける。すると、我慢していた涙が急にボロボロと零れだした。
「わかってる。最初は拒否されるって覚悟してた。覚悟してたのにね」
涙は止まらない。
なんて自分は無力なんだって思う。そして、心の弱さも改めて実感する。
リストカットしている本人が一番痛いはずなのに。
どうして私は泣いているんだろう。
カヲルは黙って胸を貸していたが、薫の両肩をぎゅっと握った。
「大丈夫だ。彼女にも伝わっているはずだ。最初は疎ましくても、お前の気持ちに気付いてくれるはずだ。あの行為は自分自身じゃなく、周りを傷つける行為と言ったのはおまえだろ？」

薫はカヲルのその言葉で顔を上げた。涙でぼろぼろでくしゃくしゃになった顔を上げた。その頭をポンポンと軽く撫でる。なんてやさしい瞳なんだろう。

「ふぇ……ん」

また薫は胸元に泣きついた。私の事を理解してくれる。そんな人がいる。

違う涙が薫の頬を伝った。

そんな薫を見つめていたカヲルだったが、急に身体を強張らせて薫を引き離した。

「ごめん。帰るよ。見回りの途中だった」

そういうなり、ドアの向こうに消えた。

カヲルは足音を立てずに廊下を走り、自分の部屋へと戻った。

そして壁に背を預け、俯く。

「俺は……」

そう言うと、ずるずると身を落とし、蹲ると頭を抱えた。

りえと綾はもう眠っているのだろうか。ここの子供たちの部屋は二人部屋になっており、今日はりえの同室の子は別の部屋に移ってもらっていた。

りえは何か気付くだろうか。そう薫は期待した。

仲の良い友達が叱ってくれると、綾の行為は止まるかもしれない。きっと私は避けられるようになるだろうから、りえだけが希望だった。

もし夢が変化あれば、少しは好転したということかもしれない。

そう期待して薫は眠りに落ちた。

夢の中はぼやけた乳白色の色に満ちていた。薫はぼうっとその場に立ち尽くしている。
目の前には生垣に柵。その向こうに小さな少年が石で出来たベンチに座っていた。
向こうを見ている。遠くを。
何も感情がないかのような無表情な顔で遠くを眺めていた。
くるくるの黒い髪、細い体。
薫は手を伸ばした。薫の小さな手が少年に向かって伸ばしていた。
生垣と柵が邪魔で届かない。小さな薫は一生懸命その子に向かって呼びかける。
少年は振り返らない。

目覚ましの音で薫は目を覚ました。
昨日は綾の夢を見なかったな……。何か別の夢を見た気がするけれど、覚えていない。
もしかしたら、昨日はお泊りが楽しくて、夢を見なかったのかな？そうだといいけど。
朝食の準備の為に下に降りた。するとそこにはすでに、りえと綾がいた。朝ご飯の準備をしている。
「あれ？　今日りえちゃん当番じゃないよ？」
薫は自分のエプロンを取り出し、準備をはじめる。
「綾が、泊めてもらったお礼に手伝いたいんだって」
一晩語り明かしたのだろう、二人とも目の下には軽くクマができていたが、なんだかスッキリした表情だ。だが、やはり綾はカーディガンを羽織っている。おそらくそのまま隠し通してしまったようだ。
「そっか、偉いなぁ。私なんかぐっすり寝ちゃうけどね」

綾に笑いかける。だが、綾は複雑な表情で顔を背けた。大丈夫、きっと届く。カヲルも言っていた。信じよう。
そういえば、昨日のカヲルの態度はおかしかったな。どうしたというのだろうか。
準備をしていると、次々と子供たちが起きてきた。「おはよう」と挨拶を交わしながら料理を運ぶ。最後の子供と一緒にカヲルがやってきた。
「おはよう」
「ああ」
ながーい伸びをしながらカヲルは子供たちの点呼を始めた。いつも通りのカヲルだ。気にしないほうがいいのかな？
朝食を終え、綾が部活の準備の為に帰ることになった。
玄関まで皆で見送る。
「それじゃあ、七夕まで二週間ほどよろしくな」
カヲルが綾の頭を撫でた。恥ずかしそうに綾は頷く。
「施設のイメージが変わりました。ありがとうございました」
ぺこりとお辞儀をして、綾は門を出て行く。心なしか、昨日会った時の覇気のなさは少し消えたような気がした。だけども、全然安心なんかできない。お泊りで楽しかっただけかもしれないのだ。
薫は一緒に玄関まで見送っていたりえを捕まえ、人気のないところまで連れて行った。
そしてりえの両肩をしっかりつかんだ。
「綾ちゃんをよく見ていて。ちょっとしたことでも。りえちゃんだけが頼りなの」
綾の腕の事は私からは言わないほうがいい。りえが直接見て、怒ってくれたほうがいい。それに私から言う事は陰口になってしまうから。
薫の真剣さに気おされぎみに、りえはうん、と頷いた。
「なんかあるの？」
「なんだか心配なの。悩み事がありそうな感じがしてね……」

それはりえが見つけて欲しい。と言った。
「わかった。気をつける」
その言葉を聞いて、薫はりえと別れた。
ふう、と薫が一息つくと、陰からカヲルが見ていた。まったく、カヲルは忍者かのように姿を現すなぁ。
カヲルに少し笑って見せ、薫は彼に近づく。
「あれくらいなら、いいよね」
カヲルは頷くと、一緒に進みだした。
「そうだな。これからは彼女たち次第だろう」

8　花畑のヒルガオ

次の週の火曜日、りえが薫のところへ飛び込んできた。
「薫おねえちゃん！」
学校から帰宅するとすぐに薫の所へ来たらしい。綾の事だと直感でわかった。
「わかった。こっちに来て」
そう言うと薫の部屋へ招きいれた。ここなら誰にも話は聞かれないだろう。
りえをベットの上に座らせると、自分はデスクの椅子を引きずりながらりえの前に置き、そこへ座った。
りえは、ぎゅっとこぶしを固めている。
「何か、あった？」
自分をも落ち着けるように、ゆっくりとした口調で聞いた。
「……綾の手首、すごい傷だらけだったの。体育で着替えてる時、見ちゃって……」
「綾ちゃんにその事、聞いた？」
りえは頭を振った。聞いてはいけない。そんな雰囲気だったのだろう。他の人の目もあるときにそんなことを聞けるわけが無い。
「あれ、リストカットの跡だよ」
薫が言った。
「なんであんな事してるの？　綾は！　なんで……！」
「どうしてか、私もわからない。この間、お風呂で見ちゃってね。私には答えてくれなかったの。りえちゃんは、あんな事をしている綾ちゃんをどう思った？」
りえは頭に両手を当て、ぶんぶんと振った。
「意味、わかんないよ。なんであんな事する必要があるの？　なんで自分を痛めつけるのよ」
薫は微笑む表情を浮かべた。大丈夫だ。綾には、こうやって気遣

ってくれる友達がいる。
りえの両手を包み込むように薫は自分の手で覆った。
「その言葉、綾ちゃんに言ってあげて。そして怒ってあげて。自分を痛めつける前にもっとすることがあるでしょ？　ひとりで悩んでないで、こうやって心配してるりえちゃんがいるって教えてあげて」
薫はりえの顔に優しく触れる。
「たぶん、りえちゃんも辛い気持ちになるかもしれないけど、出来る？」
りえは、鼻を真っ赤にさせながら頷いた。
「あんなの見るの、嫌だもん。何が辛いのか問いただすよ」
りえは強い子だ。そんな子相手をするのも面倒という人もいるだろう。だが、りえは辛い面倒な道を選んだ。
「本当なら自分から言い出すまで待ってあげるのが、一番いいんだけどね……。でも綾ちゃん頑固そうだし。私も心配してるって言っておいて」
私なんかより、仲の良いりえが言ったほうが効果もあるだろう。
りえが怒ってくれることによって、夢も良い傾向に向かうと良いのだが。
「でも、薫おねえちゃん。どうしてそんなに綾を心配してくれるの？」
薫は自分の傷の残っている手首をりえに見せた。
「私もやってしまった事があるから。その時友達にね、すっごく怒られて立ち直れたの。こういう行為は癖になるんだ。だから綾ちゃんも癖になってしまう前にやめさせたいの。同じ経験をしている分だけ、心配でたまらないのよ。私のおせっかいなんだけどね」
「本当、おせっかいだ」
りえは真っ赤な鼻をごしごし擦りながら、笑った。

学校での出来事は此処ではわからない。

りえは次の日には綾に怒った、と言っていた。ただ、理由は教えてはもらえなかったらしいのだが。それでも、綾にとっては怒ってもらえた、という事実だけで心身は少し軽くなっただろう。
その結果が夢にも現れていた。
真っ暗闇だった綾の夢はだんだんと明るさを取り戻していた。今は夕暮れ闇ぐらいの明るさだろうか。だが、綾の行動は一時止められたとしても、原因を突き止めなくては同じ事を繰り返すのだろう。
夕暮れ闇の中、呆けている綾がいる。
それを毎回薫は抱きしめる。
今は自ら傷を作るという行為はしていないが、綾は涙を流しているのだ。

心が、泣いている。

りえの言葉でも取り払えない心の傷は一体何なのだろうか。
「……だいぶ、明るくなってきたな」
いつの間にか後ろにカヲルが居た。
ここは夢の中だ。カヲルには何処を移動するにも同じ事なのだろう。
「うん、でもこれじゃまた繰り返しちゃうよね」
原因が分かればいいのに。と薫が言うと、カヲルは綾の背後にある場所を指した。
「あれじゃないか？」
綾にばかり気を取られていたので、薫は背後の影の存在に気付いていなかった。
シルエットでも分かる。あれは女性と男性が言い争う姿。
おそらく綾の両親ではないか。
「両親が離婚しようとしているんじゃないかな」
冷静にカヲルが言った。
「そんな……」

それでは私たちは、どうする事も出来ない。
「そうだ。どうする事も出来ない。あれは彼女の両親と彼女が決める事。俺たちはその行方を見つめるだけだ」
薫はうな垂れた。両親の離婚。確かにそれは中学二年生では辛すぎる経験だ。
「私は、捨てられるの……」
それまで呆けて涙だけを流していた綾がぽつりと言葉を発した。
「お父さんも、お母さんも私が要らない。だから言い争ってる。私は要らない子……」
繰り返し、繰り返しその言葉のみを繰り返しだした。涙はとめどなく溢れ、留まる事を知らない。
「やめて。綾ちゃん。要らない子なんかじゃないよ。要らない子なんていないよ」
薫が必死になって綾を説得する。だが聞いてなどいない。薫はまた抱きしめるしかない。

ごめんね。
助けてあげれなくてごめんね。
ぎゅっと力を込めて抱きしめていると、カヲルが以前のようにまたその身体を引き離した。
「やめてっ……」
振り向いた薫の目に映ったのは、青ざめて耳を塞いでいるカヲルの姿だった。
「カヲルくん……？」
カヲルは口を覆い、薫の腕を掴んでその夢から出て行こうとする。その顔はまだ蒼白だ。

カヲルくん？

9　砂漠の砂

七夕が近づいている。もう、あと三日しかない。

何度か綾はやってきてカヲルと曲順の相談などをしに施設に来た。だが、薫には目を逸らし、離れていってしまう。カーディガンは相変わらず羽織っていたが、痛々しい傷は少し癒えてきているようにも見えた。

それだけでも、薫は安心する。

今、薫は院長の見舞いに病院に来ていた。施設には一人は大人がいないといけないので、カヲルが今回は留守番だ。

「いらっしゃい」

優しい笑みを院長は浮かべる。肺炎はすっかり治って、今は喘息を少しでも良くする為にの静養だ。

いつものように着替えを受け取り、雑務をこなして雑談をする。

院長と話すといつも心が癒されるような気持ちになる。薫はここ数日であった事が頭から離れなかったが、院長と話す事によって、落ち着いてきたようにも思えた。

綾の事。そしてカヲルの事。

あのカヲルの表情の変化には驚いた。彼の中で一体なにがあったのだろうか。

綾の言葉で表情が一変したような気もする。だが、現実の彼はそんな事は無かったかのような態度を薫にとっている。これでは聞きようがない。

「何か、心配事？」

カヲルの事で院長との話が上の空になっていたようだ。気を取り直して彼女と接する。

「なんにもないですよ」
見抜かれた動揺で、薫はあわてた。院長がいない時にこんな心配をかけたくない。
笑顔を返してみたが、すでに院長は見抜いていた。
「私を誰だと思っているの？　だてに二十年以上子供たちを育ててきたわけじゃないのよ。それにね、あなたは知っているでしょうけど、カヲルくんの不思議な能力、私も知っているのよ」
にっこりと笑いながらも意外と鋭い目つきで薫を睨む。カヲルの能力の事を知っているとは意外だったが、今までカヲルは何度も手伝いに来ているようだし、気を許しているのだろう。これはしかたない。……実のところ、大人の人にも聞いてもらいたかったという本心もある。
少しずつ、薫の口から今回の出来事が言葉となって零れてきた。

「――――そんなことが、あったのね」
院長は意外と冷静な声が薫の一部始終の話を聞き終わったあと、呟いた。
薫は自分の気持ちだけで、ここまで話が広がってしまったことに改めて後悔をした。だが、院長の次の言葉はそんな薫の気持ちを打ち消す。
「安心して。あなたは間違った事をしているわけじゃないのよ。人の苦しみを少しでも和らげたい、素晴らしい考えだわ。本当、あなたって昔から変わらない」
まるで昔の薫の事を知っているかのような口ぶりだった。だが、薫は施設が昔からあそこにあったことなど知らないのだ。
「ふふ。私、昔あなたに会った事があるの。本当に優しい子。思った事はやらずにはおれない、まっすぐなんだから」
ベットに横たわりながら懐かしむように天井を見上げる。
「優しくなんてないです……。ただ、私と同じような事をしている

子が見過ごせないだけのおせっかいな人間なんです」
「そのおせっかいが、周りを救っているのよ。……でも、そうね、その綾ちゃんの鬱の原因が両親にあるのだったら、カヲルくんも心配ね」
「え？」

カヲルが心配？

確かに、前みた夢の中では彼の顔色は蒼白になってはいたが、次の日にはいつものカヲルになっていた。彼にとっては他人の夢なのに、カヲルが気になるとは……？
ベットの上にあった腕が薫の肩に触れる。
「カヲルくんをよろしくね」
その言葉の意味がわからず、薫は困惑するばかりだった。

七夕が来た。
数日前から、小さい子供たちから高校生の皆で、ブラスバンドを向かえる飾りを作る。それだけではない、短冊から笹や、ちょっとした食べ物などを用意するにあたって、施設はいつも以上ににぎやかだった。
折り紙を輪にして飾りを作りながら、薫はちょっと笑ってしまった。
「なに、笑ってるんだよ」
遠くのほうからカヲルの声が聞こえた。どこから見ているんだ。気が抜けない。
「だって、ここキリスト教会なのに、七夕って日本の風習じゃない」
脚立で飾りを壁に付けて回っているカヲルはぶすっとした顔でそ

の問いに答える。
「七夕は、元は中国の風習だ。それぐらい知っておけ。いいんだよ。ガキたちが盛り上がったもん勝ちだ」
まあ、確かにそうか。何かイベントがあって、いつもと違う日常が少しでも増えればそれでいい。施設に来たばかり子たちなど特に気が紛れるに違いない。
「お、短冊にお願いか。何書いているんだ？」
飾りをつけ終わったカヲルが子供たちの短冊を覗き込む。子供らしい文字で「いいんちょうせんせいのびょうきがなおりますように」と書いてあった。
「まあ、それは当然だよな。おい、年長組はもう少し面白いネタ考えているんだろうな」
お願い事をネタ扱いとはカヲルは色気も何もあったものじゃない。高校生の美香に「見ないでよ！」と拒否られていた。これじゃ、私の願い事なんて読まれてしまったら、どんな笑いもの扱いされるか。隠しておこう。
「薫はまだ書いてないのか。後で見せろよ」
良かった。ばれてない。
「カヲルくんだってちゃんと書くんだからねー」
遠く、大量の笹を運んでいたカヲルに向かって大声で叫んだ。カヲルは手をひらひらさせるばかりだった。あれじゃ、書く予定ないんだろうな。内容気になるのになぁ。

昼過ぎ、ブラスバンドの先陣として綾が来た。今日のこの日が、綾がこの場所に来る最後の日だ。りえもリストカットの理由をどうしても聞きたいと、うずうずしていた。
学校ではどうしても人の目があるからと、結局聞けないでいた。りえとの打ち合わせで、綾を食堂の屋上に呼び出す事になっている。薫から言い出すとまた逃げられる恐れがあるからだ。その直前

にカヲルは、急用が出来た。といって何処かへ行ってしまった。目の離れない所でやれ、と言っておきながら、土壇場で消えてしまった。

少しずつ人が増えてくる。

近所の人たちも遊びに来てくれるのだ。中にはブラスバンドの保護者もいた。

「わー。上からみると、人が多いねぇ」

綾がはしゃいでいる。こういうレトロな屋上に上ったのは初めてなのだろう。

そこに薫が現れた。瞬間、綾の表情が硬くなる。

「やっぱり、腕の事言ったの薫おねえちゃんなんだ」

その言葉にりえは頭を振って否定した。

「違うよ！　おねえちゃんは何も言っていない。私が相談していたの。綾の悩みをどうしたら助けてあげられるか！　おねえちゃんは一緒に心配してくれてるの！」

薫とりえは二人でよく話し合っていた。リストカットをする気持ち、したくなる気持ち。そして、それを見てしまった人の気持ち、お互いがその心をわかるから、お互いで理解しあった。そうして綾をどうやって止めようか、と話していたのだ。

もちろん、その後にカヲルにも話は聞いてもらっていた。というか、強制報告だったが。

「綾、私はその傷を見て、すっごく悲しいよ。どうして私に相談してくれなかったの？　薫おねえちゃんが言う、他人を傷つける行為って本当だよ」

綾は無言で聞いていた。俯いて聞いていた。

「だから、教えて。綾がそんな事をしてしまった理由を」

薫は言葉をさらに加えた。

「心はね、考えれば考えるほど、重く、苦しくなっていくの。たとえ私たちが聞いたところで解決できる話じゃないかもしれない。でもね、勇気を出して言葉に出す事で、すっきりするんだよ。それだ

けでも、心は軽くなれるんだよ」
そこまで言うと、綾はぽろぽろと涙を零しだした。ずっと我慢していたに違いない。
「……だって、言ったって、面倒くさい奴って思われると思っていたんだもん。こんなに想ってくれている人がいるなんて思って無かった……」
涙は止まらない。まるで、あの時に見た彼女の夢の中のようだ。
薫はたまらなくなって綾を抱きしめた。夢の中と同じように。
「……夢で時々出てきたのは、薫おねえちゃん？」
無言で薫は頷く。夢の中の出来事を言い表す事が出来ないでいたが、綾は薫の存在を認識していたのだ。
「だから、教えて。心が辛くなってしまった理由」
薫は綾から離れ、りえの元に戻る。りえも同じようにぼろぼろと泣いていた。
「私は、要らない子なの……」
ぽそりと綾は言った。
「お父さんと、お母さんが毎日言い争いをしていて……。離婚をするみたいなの。私、どっちにも要らないみたいで、ずっと私の事でもめているの、どっちにも要らない子。だから、私、こんな私、消えてしまえってずっと思ってた」
やはりカヲルの指摘は当たっていた。親の離婚にゆれる子供。どうして親は子供の気持ちを気付いてあげられないのか。薫が思わず下を向いている間に、りえは綾の元に歩み寄っていた。そして頬を叩いた。
「馬鹿！　どうしてそんな事を思うの。離婚だって親は生きているじゃない！　いつでも会えるじゃない！　私とか、此処にいる皆なんて、会いたくても会えないんだから！」
りえは綾を揺さぶる。もう二人とも涙でぼろぼろだ。
「だって……」
「だってじゃない！　私にはお母さんがいるけど、ここの皆はお母

さんもお父さんも、もう二度と会えないんだよ。それでも元気に生活してる！　誰も自分を傷つけたりなんてしていない！」
綾はその言葉にその場へ蹲った。自分より不幸な境遇な人が綾を叱り付ける。
「私は要らない子……」
今まで繰り返し言っていた言葉を綾は呟いた。もう、それは呪文のように彼女を縛り付けていた。
「本当にそれは親に確認したのか？　ちゃんと聞いたのか？」
突然、カヲルの声が響いてきた。気が付くと階段の入口でカヲルが登ってきているのが見えた。後ろに綾の母親らしき人を連れていた。カヲルはこの人を捜していたのか。
「綾！」
母親は、綾に駆け寄ると彼女の着ているカーディガンの腕の裾を捲り上げた。痛々しい傷がそこには消えることなく残っている。おそらくカヲルが前もって伝えていたのだろう。その傷を見ると母親は綾の傍に崩れ落ちた。
「ごめんね。綾、ごめんね」
綾の腕を摩りながら、母親は泣き出した。
「綾がこんなに苦しんでいたなんて、お母さん知らなかった。確かに離婚の話は出ていたわ。でも、こんなことになっていたなんて……」
一番近くて、遠い存在はもしかしたら親なのかもしれない。一緒に住んでいるはずなのに、お互いの気持ちがわかっていなかったなんて。
「最初はたわいも無い喧嘩だったの。それが治まりきらなくなって…。でもお父さんも私もあなたのこと要らないなんて、全く思っていない。信じて……」
「おかあさん、私要らない子じゃないの…？」
「当たり前じゃない！　お父さんとだって、きっとやり直せるから」
親子は折り重なるように泣いている。りえもそれを見ながら涙ぐ

んでいた。

「――――要らない子供はいるよ」

何故かカヲルが口を挟んだ。例によって顔は青ざめている。
皆、カヲルを見た。カヲルは屋上の端に立っている。
そんな所、あぶないじゃない……。そう言おうとした。
「要らない子、それは俺だ。俺は此処に捨てられたんだよ」
カヲルの髪の毛が下からの風によって煽られている。そして目は遠くを見ていた。
「記憶の端に残っているものは、忌まわしい言葉。怖い、気持ち悪い、なんでこんな子が産まれたんだろう……」
それはカヲルの能力の事なのだろうか。幼いカヲルは能力をコントロールできないでいた、ということは聞いた事がある。
「唯一手を引かれた事があるのは、此処に連れてこられた時だな。此処の門の前で、小さいリュックを背負わされて「ここで待ってて。直ぐ戻るから」という言葉が最後だった。それからどれだけ待っても、両親は戻ってこなかった……」
カヲルは綾を見た。そして悲しそうに笑った。
「要らない子は居ないほうがいいんだろ？」
カヲルの身体がふわりと傾いた。スローモーションで倒れていくカヲル。
皆、体を硬直させてしまっていた。
薫は叫んだ。そして反射的に足を動かした。

こんな夢、見た事があるじゃない！

必死に身体を動かす。そして手を伸ばした。カヲルはそのまま視界から消えようとする。その腕を掴んだ。

何やっているんだ。という表情を彼は浮かべる。

薫の力ではカヲルを引上げるどころか、一緒に屋上の床から滑り落ちた。

10　七夕の夢

ガサガサ、バキバキという音と、衝撃が薫を襲った。
カヲルは薫を守るように、身体を抱きしめる。そして、二人は生垣の中に落ちた。
「う……」
しばらく衝撃で動けなかった。ただ、ちょうど真下に桜の木と生垣があったので、それが地面の直撃を避ける事が出来た。
「……どうして、おまえまでついて来るんだ……」
薫は痛む体を起こした。どうやら大きな怪我はないらしい。しかしカヲルは薫のクッション代わりになってくれたので、まだ動けないでいた。でもその口調では大丈夫そうだ。
パンッと薫はカヲルの頬を叩いた。
落ちたショックや衝撃よりも、薫はカヲルの言動の方が痛かった。
ボロボロと涙が溢れる。
「何が要らない子よ！　誰が要らない子ですって！？　ここの子供たちは？　院長先生は？　皆あなたを必要としてるじゃないの！　そんなのも分からないの！？」
泣きながらカヲルの胸を叩く。苦しそうな表情を一瞬したが、そんなこと知るもんか。
「確かに、辛い経験だよ。あなたがどんな苦しい思いをしてきたのか私にはわかってあげられない。親に否定される辛さはどれだけ辛いのか、わかってあげられない。でも、私たちがいるじゃない。私だって、子供たちだって、あなたを必要としてる。乗り越えてみせてよ！　乗り越えてよ！！　ねえ！」
胸ぐらをつかんで、揺さぶりながら泣きつづけた。
カヲルは泣きそうな表情をしたが、諦めたかのように薫になされるがままになっている。
そして、腕を持ち上げて手を薫の頭の上に置いた。

「……俺の負けだよ」
それだけ言った。

やがて、皆が駆けつけてきた。
カヲルはまだ倒れたままだし、薫も泣きつづけていた。だが、二人が一応は無事と分かると、救急車だとか、担架だとかで大騒ぎになった。
「あー。大丈夫ですよー。このお姉ちゃんがどいてくれないだけで」
飄々とカヲルは言っている。その人ごみを押しのけて綾が飛び込んできた。
「ごめんなさい。カヲル先生ごめんなさい。もう要らない子なんて言わないから。だからこんなことは止めて」
顔がくしゃくしゃになりながら、綾は謝りつづけた。そんな綾をカヲルはやさしく撫でる。
「これでわかっただろうが。自分より他人のほうが辛いっていう事を」
カヲルは体を張って、綾にわからせた。と言う事か。いや、薫には気付いていた。あれは自分の心の内で、消えてしまいたい。という願望がカヲルの中にはあったのだ。
倒れたままのカヲルが時計を見た。
「ほら、もうすぐ演奏会の時間だ。リハーサルするんだろ?」
あまりにも平然としているカヲルに綾はきょとんとした。そして腫れた目のまま、笑顔で、うん。と言った。
綾の心のわだかまりも、母親と直接話をすることで消えただろう。そして、リストカットはもう止めるだろう。
綾はブラスバンドのメンバーの元に走っていった。
それをカヲルと薫にりえは見送った。
「……なぁ、いい加減どいてくれないか?」
カヲルは呆れたように薫に言う。

演奏会が始まった。
食堂のテーブルを奥に押し込み、簡易の演奏会場が出来ている。
子供たちは知っている曲に盛り上がり、膝をかかえて座り込んで聴いている。一曲終わるごとに大きな拍手がバンドのメンバーに送られた。
綾はクラリネットを器用に吹いている。その制服にはもうカーディガンは羽織られていない。痛々しい傷は大きなバンドエイドで隠されてはいるが、もう、必要がなくなるのではないか。
ブラスバンドの父兄として、綾の母親も一緒に聴いている。先ほどの涙はもう無い。
少し離れた椅子で、薫とカヲルは座って聴いていた。なんせ、つい一時間ほど前に屋上から木々に助けられたとはいえ、落ちたのだ。薫は多少の擦り傷と打撲程度では済んだが、カヲルは少し辛そうにしている。後で病院に行かなければならないかもしれない。だが、手足などは無事だったので、こうやって一緒に聴いているのだ。
「ねえ、本当に大丈夫なの？」
薫が心配そうに声をかける。
「ちゃんと生垣の上に落ちたからな。ま、重りがついてきたのがちょっと堪えてはいるけどね」
重りというのは私の事か！　こっちは心配しているのに！　もう。
薫はカヲルの胸あたりをバシンと叩いた。苦しそうにカヲルが咳き込む。
「まったく、お前はなぁ……」
「素直じゃないカヲルくんが悪いんじゃない」
ぷいっと顔を背ける。
お祭りは演奏会のマーチで終了となった。

子供たちははしゃぎすぎたのか、いつもの時間よりも早く眠りに落ちた。
薫はお風呂に入った後、改めて傷の手当てをしてもらい、自分の部屋へ戻っていた。
カヲルはそろそろ病院から帰った頃だろうか。あの落ちた直後はああは言ったが、カヲルの過去にあんな辛い事があったなどとは知らなかった。謝らなければいけない。
カーディガンを羽織り、外に出ようと扉のノブを手に取った。その時ちょうどノックの音が鳴り、薫は驚いてしまった。すぐに扉を開くと、そこにはカヲルが立っていた。
胸周りを包帯で巻き、体中ガーゼだらけで、なんとも痛々しい。カヲル自体はなんてことはない、という表情をしているが。
「ちょっと、話があるんだ。来てくれるか？」
薫は頷くと、カヲルの後を追った。

「こんな所があったんだ」
教会の鐘がある場所だった。だいたい四階くらいの高さになるだろうか。ちょうど人が二人くらいでいっぱいになってしまう鐘台。
「ここはさすがに危ないからな。いつもは鍵をかけて入れないようにしているんだ。もうこの鐘は使っていないしな。そして俺の隠れ場」
鍵の束をカチャカチャと振って、ニッとカヲルは笑った。
「カヲルくん、隠れ場いっぱい持ってるね」
統計からいうと、七夕は曇りや雨の日が多いという。だが、今日は澄み切った夜空が広がっていた。さすがに東京であって天の川は見えないが、それでもいつもよりは星が出ているように見える。
「院長、来週退院だってさ。それにもう保育士の手配もしているそうだ」
薫の心に少し寂しい気持ちが覆った。色々な出来事があったこの数週間、大変だったけど、楽しい事の方が多かった気がする。それ

にカヲルとこんなに一緒に居れるのはこれが最後かもしれない。
「……そっか。少し寂しいね」
カヲルは頭をガリガリと掻いた。
「まあな。五月蝿いガキどもだったが、いなくなると静か過ぎるだろうな。俺もやっと学校に復帰できるわけだが」
ちょっと目もとがじんわり潤んでしまって、薫は外の夜空を見上げた。
なんだか、今回は泣いてばかりな気がするなぁ。涙腺が緩みっぱなしだぞ。駄目じゃん私。
カヲルに背を向けたまま、薫は今日の出来事を話した。
「私、ごめんね。今日酷い事カヲルくんに言ったよね。よく考えたらとてつもなく辛い出来事をカヲルくんは経験してきたのに、乗り越えてみせろだなんて……」
思わず俯く。言葉はことだま、そう言ったのはカヲルだ。
その言葉を勢いだけで言ってしまった。それが後悔というものがおそう。
「……ごめんね」
振り向いて、ちゃんと顔を見て謝ろうとした時だった。
後ろからカヲルの腕が薫を覆った。
「謝らないでくれ」
ぎゅっと、カヲルの腕に力が入る。まるですがるかのような、抱擁。
広い胸が華奢な薫の体を覆う。
「……嬉しかったんだ。俺には」
いつものカヲルらしからぬ、弱々しい口調で彼は言った。
薫は驚いて振り向こうとした。
「こっち、向かないでいてくれるか。少し、このままでいさせて欲しい」
カヲルの小さい頭が薫の肩に乗った。深いため息が聞こえる。
辛かったんだ。今回の綾の一件は。偶然とはいえカヲルのトラウ

マに触れてしまった。
薫は力を抜いて、カヲルに寄りかかった。そして腰のあたりに巻かれたカヲルの腕に自分の手を乗せる。
「……うん」
薫は目を閉じる。カヲルのぬくもりが伝わってきた。暖かくて心地よい。
少しでも、カヲルくんの辛さが和らぎますように……。

11　太陽の下

数日後、子供たちと薫が外で遊んでいると、門の向こう側にタクシーが止まった。
そこから降りてきたのは、カヲルと院長だった。
「いんちょうせんせいーーーー！！！」
それに気付いた子供たちは一斉に院長のほうに駆け寄る。薫も思わずそちらに向かう。
もう数日入院の予定じゃなかったっけ？
院長は子供に囲まれ嬉しそうにしていた。もうすっかり元気そうだ。
カヲルは輪の外に外れ、薫に近寄ってきた。
「強引に退院してきてしまったよ。あの院長。全く、こっちが心配しているのにも関わらずにさ。あと二、三日くらい大人しく寝とけば良かったのによ」
そう言いながらも、カヲルも退院に喜んでいる様だ。素直じゃないんだから。
「だって、暇でしょうがなかったのよ。あの病院。皆といないとつまらないわ」
わーいと子供たちがはしゃぐ。カヲルの顔が決まり悪そうな表情になった。
「さあ、みんな、お祭りの後片付けが残ってるでしょ！　今からキレイにするからね。手伝いなさい！！」
さすがカヲルの育ての親だ。強引さは半端無い。全く、そっくりだ。

短冊はしばらくの間飾っていようという事で、外に出していたが、ちょうど良い機会なので片付ける事にした。昔は川に流していたよ

うだが、今はそんな事は出来ない。残念だが燃やす事にする。
薫は火の見張りで、ぼうっと立っていた。お願いの短冊を少し読んでみたりする。
ほとんどが、院長の回復を願うものばかりだったが、他にも「お母さんに会いたい」など切ない願いが書かれていたりして、胸がきゅんとなった。
そういえば、カヲルの願い事はどれなんだろう？　こっそりと探してみたりしていると、後ろから、ぬぅっと影が現れた。
「おまえが探しているものは、無いぞ？」
びっくりして振り返ると、カヲルがいた。手には緑色をした短冊が握られている。
あ！　それ！
カヲルはポイッと炎の中に入れてしまった。あああ、見損ねた。
「なんて、書いてたの？」
「秘密に決まっているだろうが」
そうだよね……。薫ががっかりしていると、カヲルは笑いながらもう一枚短冊を取り出した。薫が書いた短冊だ。
「ああ！！　それは！」
慌てて取り戻そうとしたが、背の高いカヲルが腕を伸ばしながらひらひらさせている。薫の身長では全く届かない。
背伸びして無理やり取ろうとして、カヲルの腕を振ってみたが、無理だ。そのうちに勢い余って、短冊はカヲルの手から離れ、火の中に消えてしまった。
見られたのか、見られていないのか気になってカヲルのほうに振り向くと、カヲルはニヤニヤしている。……見られたな。これは……。
「カヲルくんのお願いは何だったの？」
ふてくされながら、薫は聞いてみた。答えてくれるはずもないか。と思いながら。だが、カヲルは一言だけ言った。
「俺の願いは叶ってるんだよ」

え？
「ちなみに、お前の願いも叶っているんだけどな」
そう言いながら、相変わらずの足取りで、去っていってしまった。
向こうで院長がカヲルを呼んでいたのだ。
私のお願い、「名前で呼んでくれますように」
叶っていた？
薫はカヲルの言動を思い返してみる。

夕食後、院長がこっそりと薫を呼び出した。カヲルくんには秘密でね。と言いながら。そうっと院長の部屋へ入る。
院長の部屋も薫とカヲルの部屋と全く変わりが無い部屋だった。
お茶を出され、ゆっくりとした時間が過ぎる。そして、院長は今回の話を薫から聞いていた。
「そう、カヲルくんそんな事をしたのね。相変わらず無茶ばかり。あの子、計算ずくのようで実は勢いでいっちゃうからね……」
「そうなんですよ。おかげで一緒に落ちた私までいい迷惑で」
などと言いながらも、実は結果オーライのような気もした。
院長は薫の様子をみると、何故か笑っていた。そして、急に小声になって話し出した。
「ちょっと昔話をしましょうか。女だけの秘密の話」
この人は相変わらずお茶目な事を言う人だなと思いつつ、耳をかたむけた。
院長は懐かしむように遠い目をする。
「そうね、カヲルくんが来たのはあの子が五歳くらいの時かしら。私が門を開けたらその階段に、ちょこんと座っていたの。ただ、遠くを見ていたわ。パパ、ママは？　と聞くと、ここで待っているようにって言われたって、それだけしか言わないの。もちろん私も一緒に待ったけど、予想はついていた。リュックのポケットを見ると封筒が入っていてね、「私たちには無理です」とだけ書いてあった

の」
　なんて辛い出来事なのだろうか。五歳という年齢といえば、もう物心ついているはずだ。それなのに、置き去りにする両親。カヲルは今、両親の事をどう思っているのだろう。
「一緒に暮らしだしてもね、あの子、誰にも近づかなかったのよ。もう本当に孤独で私にはどうしようも出来なかったわ。ただ、門の近くにある石のベンチに座り込んでね。外をずっと見ていたの。きっとまだ待っていたんでしょうね……。そのうちに、私にも彼が不思議な能力を持っているのに気が付いたの。その力を使いたくない。だから彼は誰とも接触しようとしなかった」
　そこまで言うと院長は薫の顔をよく観察するように見ると、微笑んだ。
「それが一年くらい経ってからかな。彼が毎日のように施設を抜け出すようになったのよ。どこに行ったのか全くわからなくって、探し回ったわ。でも食事の時間には帰ってくる。その後くらいから、少しずつ彼が人と打ち解けるようになってきたの。これは何かあったと思うじゃない？」
　問い掛けられても、薫には答えることが出来ない。ただ、そうですね。というばかりだった。
「私、観察する事にしたの。カヲルくんを。そうしたら、午後の近所の保育園が終わる時間に門の向こう側からカヲルくんに向かって女の子が手を振っていてね。そう、薫さん、あなたよ」
「私！？」
　思わず声を張り上げてしまった。院長はシーと口に指を当てた。
「薫さんが来たら、カヲルくんパッと顔を輝かせてねぇ。重い門を小さい体でこじあけて外にでていってしまったのよ。不思議でしょうがなかったわ。一年かけても私はカヲルくんの心と打ち解ける事が出来なかったのに、薫さんにはそれが出来たみたいね」
　確かにカヲルとの思い出した自分の記憶では、カヲルは幼馴染として記憶に残っていた。だが、それ以前は全く思い出せない。たぶ

ん幼少期の記憶だからだろうとカヲルは言っていたが……。あんなカヲルを施設から引っ張り出すなんて大胆な事を、我ながらよくしたものだ。

「一度、彼がいない隙にあなたとお話した事があるのよ。どうやってカヲルくんと仲良くなれたのって聞いたの。そうしたら、ケロッとした顔で、「ひとりでさみしそうだったから」だって。無垢な子だからできる事よね。……それから薫さんの事件があって、あなたは何処か遠くに引越していってしまった。カヲルくん、すごく泣いてね。絶対あなたを捜し出すんだ。って言って今までできたの。それがカヲルくんの原動力だったんじゃないかな？そしてあなた達は再び出会った。……こんな話、彼には内緒よ？」

院長は最後には軽くウィンクをしてみせた。

そんな事があったなんて、カヲルは全く教えてくれなかった。ただ、言葉に救われたと言っていた事はあったが、そんな事実が隠れていたとは。

「まあ、カヲルくんも捜した甲斐があったでしょ。捜した相手がこんなに可愛くなってね」

薫は唐突な事を言われて、顔を真っ赤にさせた。

「いいえ、私なんて……」

「そこまでされたら女冥利に尽きるわね。もう、逃げられないわよー」

最後は笑い話にしてくれた。院長は本当に面白い人だ。カヲルくんがあんな育ち方をしたのがよくわかる。薫も笑ってしまった。

薫とカヲル、腐れ縁と思っていたものは、カヲルの熱意だった。まだ縁は続きそうな予感がする。

無事保育士も決まり、カヲルと薫は施設から離れる日が来た。
薫の場合は自宅と施設を行ったり来たりの生活だったが、後半はほぼ施設で過ごしていたことになる。カヲルなど三ヶ月ほどずっと住んでいた。
玄関で皆集まってくれていた。
「せめてお別れ会したかったのに」
仲良くなった皆が口々に言う。りえなど、べそをかいているくらいだ。薫の事を実の姉のように慕ってくれていた。
「七夕で、予算オーバーだよ。いいんだよ。そんな事されるガラじゃない」
カヲルが言った。大きな荷物を片手で軽々と担いでいる。
「それに、俺の家はここだしな。いつでも帰ってくるよ」
横に立っていた薫の肩をポンポンと叩く。
「このねぇちゃんも、一緒にな」
わぁい。と皆が喜ぶ声をあげた。薫もうん、と笑顔で頷く。
「絶対、また遊びに来るから。お料理のレパートリー増やしておくからね」
笑顔で門をくぐる。だがやはり、寂しい気持ちは抑えられない。
「また、来ようね」
鼻を擦りながら、薫は言った。

大騒ぎの日々だった。そして、綾の出来事。
あれ以来、綾の夢はもう見ない。
幸せな夢を見ていてくれていると、いいんだけど。
「言葉は、ことだま。か。本当にその通りだな。改めて実感するよ」
言を葉に乗せ、相手に贈る。本当に伝えたいもの。それは心の言。
「思っているだけじゃ、伝わらないんだね。カヲルくんみたいに心の声が聞こえても、やっぱり言葉にするって大事なんだね」
カヲルはふっと笑った。

「何？」
薫は不満そうに顔を上げる。
「おまえは、昔と言う事が変わらない」
「それって、進化してないって事？」
ぷぅっと頬を膨らませてみた。それを見たカヲルは大爆笑だ。
「まあ、いいんじゃないか？」
夏の夕暮れが、闇に変わろうとしている。
綾の心が夏の朝のような爽やかなものになるよう、薫は心から祈る。
そして隣にいるカヲルを見上げた。
カヲルの心も晴れやかになりますように。
二人は丘を下っていく。

＜了＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0514t/

コトノハ　＜深海魚２＞

2011年6月12日16時41分発行